明治二十一年十月一日發兌

以良都女

第八號

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

例言

本誌の目的は婦人の職分を全くし、令德を進め、及び地位を高むるにあり。家政の欄には一家を調理すべき方法を載せ、姫鑑には令德を進むべき佳話、實傳を載せ、雜錄には美術に關する事項或は交際の心得を載せて優美高尚の風を養ふべく、その他時時の要報及び評論を掲ぐるものなり。

いらつめ第八號目次

いらつめ。　婦人と新聞紙。
姫かゞみ。　ふくさづゝみ第五回。まアがれッと第三回。
講義。　美術の話(前號の續)。
文藝美術。　樂典初歩。唱歌(新年の唱歌。花鳥。春の遠山。武藏野の山吹。下總なる藤澤村を過ぎて)。新形の封袋。繪書。
學藝。　炭薪を儉約する法。
叢話。　鼠れとし。
批評。　交際の栞(シヲリ)。女子教育新論。俠美人。
家政要論。　注意の價値。
月報。　數件
通俗衛生學。　醫學士竹中成憲氏口述。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

いらつめ第八號

いらつめ

婦人と新聞紙

凡そ婦人の毎日務む可き仕事ハ其數頗る多く、一々數へ擧るハ固より難き事ながら先一家經濟の大体より家内の清潔、器具の整頓、勝手の取締、衣服の裁縫、兒童奴僕の保護、良人其他の身上の注意、來客の接待等百般の務ハ婦人の或ハ自から之に當り或ハ奴僕を指圖して一切不都合無からしむべきものにして人も吾も皆其欠く可からざるの用事なることを知れども余儕ハ猶婦人毎日の仕事に加ふるに新聞紙を一讀するの勞を以てせんとするものなり。

蓋し婦人の職務にして最も大切なるものゝ一ハ良人の話相手となり相談相手となり良人の喜ぶ所ハ共に之を喜び良人の愁ふる所ハ共に之を愁ひ之を慰め之を勞ひて良人をして外に勞するの辛苦を忘れしむるに有ること固より言ふ迄も無く明白の事なりとす。　然るに近來婦人の交際も漸次隆盛に赴き、世間の事情に明なる人々も大に増加したることながら、概して之を言へバ人に接することも男子より少なく、外に出ることも亦男子より少なきが故に知らずして世間の實況に踈く、亦踈くとも敢て大なる差支無きが故に強て之を知るの便宜をも求めざるの傾あり。　然とも男子の喜憂を感ずる者ハ所謂世間の事情なるものに關すること多く、社會に於て位地の進みたる、某々の事業に關係して良好の結果を得たる、某々の事件に由て某々の影響を受けたる等凡そ世上の出來事に由りて或は喜び或ハ憂ふることハ男子の生活に免る可からざることなり。　然るに其位地に果して如何なる價ある其事件の果して何事たるを知らざればバ如何して共に喜び如何して共に愁ひ如何して之を慰め之を勞はんや。　社會の事物ハ極めて組入たる者なり。　一事の起りたる毎に一々説明の説明を要するが如くんバ到底話相手相談相手の職務を盡すこと難かるべし。

扨て又近來ハ女子交際の漸次に盛ならんとする最も喜ぶ可き時代なり。　夫れ談話ハ一種の技術にて極めて熟練し難きものなり。　兩人相語れバ或ハ自己の身上に渉りて無益の事を繰返し或ハ他人を批評して褒貶毀譽を逞ふするハ男女を問ハず談話の兎角に走り易き事柄にして甚だしきハ談往々猥褻に渉ることあり。自己の身上を而已語れバ聞く者の嫌厭を來し、他人を批評するハ猶一層徳義に反するの事なり、猥褻の談話は風

俗に害あり、談話の事柄にして自他を害せず德義を損せず最も愉快にして最も適當なるものハ所謂世間話なり。以上の理由なるに因り世間種々雜多の出來事に注意して世上の事情を知るハ交際談話の爲最も肝要なる事にして方今女子交際の行ハるゝ世の中にてハ婦人の心得置かるべき事と信ず。

婦人の職務を盡すに付ても女子交際の上に付ても最も欠く可からざるものハ世間の事情に通じ世上の出來事を知るとなり、而して此目的を達するの最も手輕なる方法は毎日新聞紙を讀むに在り。蓋し近來少しく文字あるの女子ハ新聞紙を讀むもの其多きに居るべしと雖ども新聞を通讀すは隨分煩ハしきものなれバ或ハ各自の好む所を擇んで其他を顧みざるの弊なしとも云ひ難し。余儕の望む所ハ事の小なるを問ハず凡て世間の出來事を知るを目的とし官制組織より商賣の有樣に至る迄彼樣なるものなるべしとの思想を造るに在り。殊に新聞紙をも讀まず世間の事情にも通せざる婦人にハ余儕ハ前に陳べたる緊要の目的を達するが爲尤も容易なる方法として日々必ず新聞紙を一讀することを勸め且つ他人の同一の勸告を爲さんことを希望するものなり。

姫かゞみ

ふくさづゝみ　第五回

美妙齋主人

眠さうな、薄暗い洋燈をば、「ぢれッたい」と言はぬばかりに睨付けるから直子は覗込んで心を繰上げ、

「本當にこの洋燈を見ても思出しますよ。斯う明るいけれバ何も邪推は出ませんが、前のやうに暗いけれバそれこそ棕櫚箒が鬼に見えますわ。宮雄さんの方を斷れバ些し親父の身分にもかゝハるやうな事が起るかも知れませんといふので、凡夫の悲しさ、今ハそれがために阿父さんはじめ此頃でハ、堅く執ッて動かぬ妾の決心を見てをかしく疑がふやうになッたのですよ。胸に穴が有るならバと雛衣も言ッたとほり、痛くない腹を探られるのは最う最う何うしたら宜いか分解らないほど忌々しいのですよ」。

言ひながら然も無念さうに直子ハうつむいて火箸で炭火の灰を追剩して居た。妾も他の事ながら其心の中を推量れバ如何にも氣の毒で思はずも太い息を忍出させた。

「左樣ですねェ。それを疑ふのも先無理ではありませんが隨分褒められたことでもありませんね。あの雛衣で思出します

が、あの御床にある濱路の繪、ね、あれも時代が時代とは言ひながら分解らぬ人に思はれて分解らぬ人に勸められ終にあゝいふ悲しい最期を遂げたのですねヱ」。

この一言をば妾を深い思慮も無くて言ッたが、直子にはそれが變に思はれたと見えて、何やら怨めしいといふやうな顔色をあらはした。

「濱路もあれで氣に入らぬあがらも兩親の言葉に從ッてさへ居たなら何もあんな憂目には逢ひませんでしたらうよ、ね。全体あんまり婦人の癖に選抜擇抽を爲るのは生意氣かも知れません」。

賴む垣根にも離されては女郎花も流石に可笑しくすねた。

心の中はさこそと思へば妾も今は氣の毒で

「でも直逆左樣許りも。そして阿父さんの此頃の御見込も」。

「見込ですり、その事でも。子として斯う言ふのは變ですけれど御存じのとほり阿父さんはあのとほり心が温順過ぎるはどでそうら宮雄さんの方から否にむづかしく掛合されると其度毎に顔色を變へて居るのです。それだから今の心組ではまア先方の權威にされされて……」

「では何うしても、角しても」。

「えゝ妾をば那の人にやる氣に爲ッて仕舞ッたのです」。

話半へ障子を開けて首を出したは前の下女、

「宮雄さんが只今これへ」。

直子はそれと驚いた。

「入らッしやるの、本當に」。

「えい」といふ下女の挨拶を耳で聞きながら、「否な」の意味が籠ッて居る眼とば妾の方へ向けて莞爾笑ひ、直に下女を呼留めて、

「あの、少々御待ちなすッてと申して御呉れ」。

立去る下女の後影を見送ッてから直子は直に妾の耳へ口を寄せて霎刻さゝやく暇も無く宮雄はたちまち入ッて來た。丁度好い機會ゆゑ、此處でその打扮や容貌を述べやうか。

年頃は二十三だといふけれども、容貌がうるはしい故か、もッと若く見えて、それをまた本人は自慢にして居た。身体の質も多血質でなるほど直子とは全く違はず、歹く擦磨くと見え、頰の皮は洋燈に映ッて光ッて居て、氣障にも石鹼と香水の香が逆上るほど匂ッて居た。琉球紬の羽織に糸織の小袖、黄八丈の下着の揃方、紺鍛の帯の締工合、婦人が見てさへ上手だと思はれるほどで、故意と捻ッて時計をば内懐にかくして居た。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

宮―「れや、是は阿園さんも……斯うと知つたら最う一つ持つて來れバ宜かつたなア。阿直さん、是は御約束の香水です」。

直―「まア何うも御氣の毒な。ヤんの冗談よ此間は申したのでそのよ」。

宮―「これで一口よ香水と云つても製法よ因つて色々のが有りまして、全ト薔薇から取つたものでも溫度の工合や水の性質よ因つて……」

わらそれさ、此處よ化學者が。直子そ返辭も仕なかつた。

宮―「香水の製造法御傳授いたしましやうか、貴方がたよ、え」。直子は此處で輕蔑の笑顏をわらわした。

直―「まさか、妾のやうなものでも香水屋の御神さんよは……や……や……ねエ阿園さん、貴娘だつてねエ……無りそしませんから、ねエ」。

園―「本當よ化學者の御神さんよて猶のことねエ」。

宮雄そきまりが歹さうよ、胡麻化そためか、口の裡で「化學、化學、……け、ミ、す、と、り、い、か」と出放題を言つて居るが、是そ全く後の話柄を得るまでの補助でわつた。

宮―「阿直さん、貴娘の御髪そ誰。毛の裏が出ないで大層うつくしいこと。あの長屋の阿幸さんですか」。

直―「ふゝ。へエ」。

宮―「御髪といふものそ一寸譯そ無いやうで中々又容易よそ結へませんよ。私も一度ゆつて見ましたが……」

わられた、今度そ髪結の博士が。妾たち二人からそ返辭がやはり出るのを否がつて居た。直子そ妾の袖を引いて、眼で先刻打合わせたことを行つて見やうと知らせた。

直―「一寸御聞き申したいことが有るのですが」。

宮―「何です。束脩を御出しなさい」。

直―「あら否な。干物ぐらゐなら出しますよ」。

宮―「あはゝ。大方魚屋のら取れと仰るでしやう」。

直―「まアそんな物でしやう。時よ御尋申すのは外のことでもありませんが、ね、わの蜻蛉日記は幾冊わるものでしやう。妾は實よまだ見ませんの」。

其處で妾も其處へ口を出し、

園―「何でも大部な物では無いさうですが……」

是で宮雄は挨拶に困ッた樣子でわッたが、流石にぬからぬ良を作り、

「たしか、十冊わりましたッけ、わ、十二冊でわッたか知らん。否、十冊、十冊です」。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

「おや左樣。直子は妾の顔を見た。

「阿園さん、先生が仰ッたよはたしか八冊ですとか、ねェ」。

園—「えヽ、八冊だと仰いました」。

此時に妾たち二人が咽喉の口で壓殺して嚥込んで居た笑の量はどれほどでわッたらうか、今更かんがへるも我ながら可笑しいけれどもまた氣の毒な心持も無くハ無かッたから、直子も直よ話を傍へ向けた。

直—「とらんぷでも爲ましやうか、阿園さん。え、宮雄さん、とらんぷでも」。

宮—「とらんぷ……まアこれよりは雜話を爲ましやうわ。阿園さん、貴女まだ御歸りあさらあいの」。

妾が居ては神魔だといふ氣色がありありと其顔には出て居たが、直子との打合もあることゆゑ、妾ハ思はぬ罪を作ッて、中々其場を立たあかッた。

園—これや可笑あ、妾が居りましては歹いのですか。

直—「阿園さん。此處に御出であそッて下さいよ」。

園—「宮雄さんが否だと仰るなら居りませんわ。けれど宮雄さん、貴下とあらあの永井の阿繁さんが体質が仝ですよ。

宮—「永井の阿繁さんが何うしましたと」。

直—「はヽヽ……阿繁さんは虛飾の癖が厶いませんと」。

宮—「え、何、私よハ貴女がたが何を仰るのか旦からない」。

園—「旦からないければ分解らないで好う厶いますが、ね、宮雄さん、永井の阿繁さんと化學がよく出來て……」

直—「香水の製造法も知ッて居ますとさ」。

散々に嘲弄されてやうやく宮雄も悟ッたと見えて俄よ顔の色と變へた。手で手遊にして居た火箸の卷藤を一生懸命むしッて居るとまゝ一番斯う言ハれた。

「わら宮雄さん……大きな赤坊が御惡戯を爲て」。

而も大きな聲で言ッたのでそれを聞く宮雄の顔ハ燧石、慙愧と呆了との火が出た。それを見る妾たち二人の胸ハ福神の巢、笑が羽を展して飛出した。笑ふ……慙ぢる……あざける……あされる……けれど優柔不斷の鹿ハ猶急湍の渦で喘いで居た。

此時の宮雄の胸の中ハ何樣であッたらう。終にハ坍と爲やうと思ッて香を愬ぎに來た蝶々も無情な横風よ羽を狂ハされて仕舞ッて、花の色ハ眼の前にあるが、それに近づく事も出來あかッた。怨めしいのさ、この横風。夜ばかりハ黒幕を引いて有難くも花を包んでハ居たが、流石よ横風をば防ぎかねて居る。氷の胸、雪のゝ。怨はつもる越路の雪。思はとけぬ越路の氷。

心一人ハ深いと見立てゝ居ても一人ハ冷いと思ッて居る。此夜ハ此儘雙方が手持無沙汰で、それからハ毒にも藥にもならぬ會話が物臭相にしばらく三人の間に行ハれたばかり、「面白く無い」を土產にして宮雄ハやがて歸ッてしまッた。跡の妾たち二人の有樣、それを言あたらしく此處で言ふほどでも無く、二人が二人笑ひながら「蜻蛉日記ハ十冊です」。

「只今までが妾の身上に伴ッて居る話でして、丁度數へますればこの宮雄といふ人が斯う弄れましたのも只今のふ半年ばかり前でした。それからも、其が先方の氣に障つたかも知れません、宮雄も前ほど足を近く直子さんの御宅へもあがらないやふになりますうち、根が虛飾な質ゆゑ、動もすればつまらぬ惡魔に附込まれることもあります、其後妾が手を變へ品を變へ、色々に奔走して聞正して見ますると近頃宮雄もある茶屋の婦人と馴染みまして、それを孕ませたとか孕ませなかつたとかで其婦人から六づかしく掛合込まれ、遂ふ何か紳士にあるまじき騷動を起したとの趣でそれなり直子との緣談も破談になつて仕舞ひましたが、實に妾も其時宮雄の品行を聞正すときも及ばぬながら是も前に受けた御恩の報じ處と一方ならず心配いたしました。其後すなはち今年のことで厶います、直子の氣象がまた人から人へ傳ハりましたのである紳士に望まれ、直子も得心して愛でたく四海浪をうたひろめました。今から思ひますればあの宮雄を嬲つたのもあんまりな仕打でハ厶いましたが、其時にも流石の直子さんさへ憎らしさに心を晴まされて居りましたので遂々あれ程に烈しく申したのですよ」。

是までが實に園子の身上に伴つて居る事柄の顚末で既に是で話も終つたとの趣で園子ハやがて暇を告げて立歸つた。約束どほり、それを書記したのが即この「ふくさ包」。久しい間御邪魔をいたしました。只今までの話も事實もあまり面白くもありませんでしたゆゑ、嘸御退屈でしたらう。次號から出しますのも「空行く月」といふ小說で聊目先の變ハつて居る物語ゆゑ、何とぞよろしく御覽を願ひます。

まアがれッと。　第三回

城の櫓に立昇りて味方の方を眺むれば其數數ふるまでにもあらず。敵の方を見亙せば溜麻もまこと只あらず。賴と思ふ英國の救は何時ぞ、今日もや來る。翌日もや來ると日に〳〵に沖の方をば望めども、他船こそ時には過ぐれ、我待つものハ

影も無し。「さては若は行く途にて或は敵に見咎められ、其處にあへなく爲りにしか。もしも誠に然ならばそも如何にせば宜かんなん。なまじひの螳螂の斧、肱を張るのみ烏滸なるよ。さもあらばわれ、我とても門と、ふ、れ、る、との妻なるを……さたなき所爲は思ふも疎まし。いでや撓まず力の限り、防ぐ心になれかしな、こや万アがれッと、万アがれッと」。

敵は既に勝誇りつ、はや外廓をば奪ひたり。翌日は一先人馬を休め、其次日に息をもくれず揉立て〳〵乗取らんと既に評議を決めしかば今宵は人皆枕を下し、鎧を脱ぎて息ふめり。敵の樣子は斯くこそと告知らされて万アがれッと流石に夜攻を掛けんかと思はざるにはあらねども猶かゝる時の常習とて猶豫していまだ胸も極らず。ひとり閑所に退けば忽心を褻來る杞憂の敵も無きにはあらず。思惑へば殘燈の風に吹かれてはや今消えんとするも人の身に比へられて味氣なく、霎時過ぐれば風絶えて舊の姿の明るさに歸るを見ても又更に顔も熱りて氣も立つなり。斗牛の影もかつ垂れて空にさまよふ雲凄く、樹立を潜る風の聲も歎くが如く聞えたる眞夜中頃と思ふ頃、怪しや城の外にあたりて囂しき聲起りたり。那を如何と聞く間も無く聲は次第に高々と響亘るをよく聞けば、これ將紛ふ方も無き矢叫の音、鯨波の聲……「さては口惜しや、油斷せし体に見せつゝ氣を緩させ、終に夜攻を掛けしよな。神ならぬ身の是非も無き、かくとは露もシラま弓、張りたる心はありながら切ッて放さん勇は無く、這方よりして先を越し、掛からざりしが鈍ましや。然らば詮術とても無し。なるべく高く命を賣らん。然なり然なり」と思案する隙も嵐の巢立鳥、簱却の筋はよわるともやはの小枝にはらされて撓るべきかとばかりにて甲斐々々しくも御身をば稍繕へる程こそあれ、入來りしは侍女あり。

「現によき折よ。汝達も最期の用意ぬかりなせぞ」。と言はれて那方は不審氣に

「そも〳〵最期の用意とは」。

「もどかはし、うとましや。聞かずや、那方の諸聲を」。

「それ仰には侍れども……いざ悦ばせたまへかし……若は、若君は今しも歸來たまひて……今敵陣に突入りて……今戰爭の最中にて……」

「これ何事ぞ若は今歸來しとや。實にか」。

意外に出でし喜悦に舌の力もはや弱りつ、我のみ貌の涙のみ既に眼をうるほしたる。「然らばたゆたふ迄にもあらず。

這方も城より突出でゝ若に力を戮せよや」。出でし言葉と是ばかり。黒白もわかぬ烏羽玉の夜にしあれば遠見にもいづれが味方か敵兵か定知るべきやうは無けれど兎に角味方の軍氣こそ毎にいまして何と無く勇みにいさみて見えたりけれ。程無く城の兵も若に力を添へんとて突出でたりと覺しくて應合とそる鯨波の聲さながら地軸も頽るゝばかり、たゞ腥き風のみと軍の樣の烈しきを告貌にして吹來つゝ……「若よ、勝てよ、負けあせぞ。這方の運は今宵にて善しとも惡しとも定まるなり。克たずばやがて此城を敵にわたすのみならず……」

かゝりしほどに東の空もやゝほのぼのと曙初めて猶眠氣なる雲脚も夜とともに急去る頃しも遙に聞ゆるは勝利々々と云ふ聲なり。扨は味方の克ちたるよと思へば昇る階段も毎にましてもどかしく急ぎ櫓に立上り對向を屹と見亘せば遠目にも猶屍の數は算を亂して臥倒れし這方にあたりて翩翻と飜れるは英國の記章の物に紛無し。

見しと僻眼にあらずしてやうやう聞けば英國の救來りて十分に味方の勝利となりしといふ。救の軍の頭領と佐ア、王たア、万にんにて若君にても非ざりき。万にいに問正せば若そのまゝ英國に止まりつゝあるとなん。是も思の外ながら兎に角寄手を名殘無く追拂ひたる喜悦と物に比ふべくもあらず。やがて終に殿なりける門とふれるを恙無く敵の手より受取りつ、一先平和の局を結びし、その本とそも誰が力ぞ。美妙齋が言はずとも人そうなづき玉ふめり。

（をはり）

講義

美術の話（前號の續）

第七。齊調とは二種の音、色、運動、形等の能く釣合ひて互に適ふとふて例へば一音階を隔てたる二の音の相調和ふが如く、赤色の能く緑色と和ふ如きを云ふ。目に見、耳に聞くものには皆此齊調ありて、例へば道を行くにも或は速く或は遲く、一歩は高く、一歩は低くして其順序の定まらざるが如く、又話を爲すにも或は調子脱れの大聲を發し、或は聞く可からざる微音を發して聲の高低話す可き事柄の性質に反し、笑ふ可きに泣き、泣く可きに笑ふの類は皆此齊調を欠くものなり。凡そ齊調なるものは進退動作の優美なるが爲に欠く可からざるものにして騷々敷殺風景なるは之に反するより生ずること多し。扨此齊調に音の齊調と目に視る所の齊調と耳目混合の齊調との三種あるが故に先視覺の齊調より始めんに是亦々分れて四つと

なるなり。即ち第一ハ形、第二ハ運動、第三ハ色、第四ハ場所の齊調なりとす

(イ)場所の齊調とハ例へば數多の物を一列に排ぶるに甲と乙との間ハ三尺、乙と丙とハ五寸、丙と丁とハ一尺二寸、其他長短均しからざる距離に之を置くときハ一目して忽ち其不規則なるを感じ何となく不愉快に覺ゆれども甲乙丙丁の間皆同じきときハ其排置方規則立ちて自から美々しく見ゆるものにして更に一歩を進め、各箇の間例へば一尺なれば五箇乃至六箇毎に其距離を廣めて一丈とせば規則立ちたる中に變化あるが爲一層の美を加ふるものなり。例へば街路に植排べたる樹木の山間に雜生する樹木よりも美きが如く覺ゆるハ主として此理に由りてなり。

(ロ)形の齊調ハ更に分て直線平面形と曲線平面形と立躰の三種と爲さゞる可からず。直線平面の美ハ二分の一、三分の一、四分の一等の如く各線互に簡單なる比例と成すより生ずる者にして、例へば長方形の坐敷を作らんに、長を三間とし巾を一間とするときハ長三間、巾一間二尺五寸等の割合とおそよりも其躰裁遙に美なるが如き、又庭の形も隅の角度と三十度四十五度六十度等大躰直角の三分一、二分の一等となそときハ其躰裁割り切れざる度數と爲そよりも宜しきが如きハ即ち此原因に由て生ずる結果なり。直線平面形の美術の法則に協ふにハ亦此長と巾の釣合の外に其目的を達そるに最も適したるや否やを考へざる可からず。例へば一の坐敷を作らんに其形を三角と爲そときハ甚だ見苦しき坐敷を生ず可し。是畢竟三角の坐敷ハ出入、行歩、器具の排置等凡て坐敷の坐敷たる効用を達そるに便あらざれバあり。

曲線平面形に於てハ元來曲線形なるものハ後に詳說そる如く美術の性質を帶ぶるものなると又圓形卵形の如きハ上下左右皆能く其齊調を得るものなるを以て是等の形ハ凡て人をして其美麗なるを感ぜしむるものなり。加之人間の關節ハ皆轆轤の形を成して眞直にハ動き難く、曲りて動き易きものなるか故に曲線を畫くハ自然にして直線を畫くハ多少練習を要する筈なるに由り曲線形を見てハ自から優容閑雅の感覺を生じ、直線形を見てハ自然窮屈困難なるか如く想像するの傾きあり。是美術上曲線の直線に優る一理なり。

立体に於てハ以上陳ぶる所の諸點の外に基礎の堅固にして能く全体の壓力に抵抗し得るや否やを考へさる可からず。大なる建物を見るにも其基礎の堅固に廣くして、柱石の丈夫な

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

るを見るときは自から心に満足を感するものにして、此理より推すときは彼の埃及の「ピラミッド」の如きは多少美術の法に協ひたるものなり。然れとも只基礎の堅固にして能く全体の重力を支ふるに足る而已にては未た充分なりと云ふ可からず。最少き勞を以て最大なる目的を達するは美術の尤も貴む所にして其原因は人をして事の甚た容易なるを感せしむるに在り。例へバ埃及の「ピラミッド」の如きは只其基礎の堅固なるに於ては誠に申分なけれども單に自身の重を支ふるか為廣大なる土臺を有し、莫大の物質を費すか故に最少の勞を用ゐるの理より之を見れバ美術の未た最も進歩せざるものなり。家屋の柱は頗る進歩したるものにて僅かに數十條の力を以て能く大廈を支ふるを得るか故に最少の勞を以て重力に抗するの理に協ひたるものなり。花瓶、玻璃盃等は底廣くして坐り良く中間細くして無用の物質を費さゞるか故に最も能く此規則に適し、樹木の美に至りては僅かに一本の幹を以て無數の枝葉を支へ、然かも其根の四方に彌蔓て曾て顛覆の恐なからしむるは所謂最少の勞を以て最大の重力を支ふるの極にして造化自然の美術の上乘と謂ふ可きなり。

（八）運動の齊調とは肢体の一の働と他の働と相調和し、且つ其働と働との間隙不揃ならさるを云ふ。而して一人の運動にも齊調あり數人の運動にも齊調あり。例へバ兵隊の行軍を見よ。一人右を踏めは數百人右を踏ミ、一人左を踏めは自余の兵士も擧て左を踏ミ秩序井然として進むか故に如何にも立派なれとも或は走り、或は止まり、或は進み、或は退き、恰も火事場の雜沓の如くならバ果して何の見る所あらんや。右は只簡單なる一例なれとも一人の動作と數人の動作とに論なく、毫も齊調なきときは決して見るに足らさるものにして舞踏に於ては動作と動作との間隙の齊調殊に緊要なりとす。

（二）數種の色を用ゆるときは能く其釣合を考へ、其能く互に調和せんとを求むると緊要なり。而して其尤も調和し易きは所謂補色なるものとす。例へば赤色の緑色に於ける青色の金色に於ける黄色の紫色に於けるか如き是なり。

試に今迄説き來りたる規則を衣服に適用して其活用を示さんに絹布の木綿より美しきは其光澤あると又之に觸るゝときは柔かなるべしとの想像を起すか故にして即ち耳目の感覺と五感の想像とに由てなり（第一及第二）。流行の衣服を喜ぶは新奇を好むの感覺より始まるものにして即ち各種の感動の一例なり（第三）。（第四）重力を支ふるに適したるか如く見える

の點に於ては西洋女服の裾廣きは日本の衣服に優れるか如しと雖とも彼の胸部の下を縮むるか如きは尤も窮屈不便にして高尚なる目より見れば第四の法則に協はさるか如し。衣服の短に過ぎ若しくは長に過ぐるの醜きは一は衣服の目的を達するに不都合なればなり。又衣服に縞あるを用ゆるは變化を入れて美を增すの目的なれとも若縞柄一定せず或る部分は縦縞或部分は縦横縞とせば甚た不体裁の衣服なるべし、是即ち異中に同しき所無ければなり(第五)。(第六)想像の餘地は衣服に適用す可き所無きが如し。(第七)例へば衣服の片袖長くして片袖短く若くは片袖に縞を用ゐて片袖に無地を用ゐ、或は脊髄の一方に偏るが如きとあらば人皆一見して失笑す可し、是即變方の間に音調を失へばなり。又曲線は直線よりも美術的の性質を有するが故に上下の如きは美術の規則に反したるものなるが如し。然れども儀式上に用ゆるときは能く場所柄に適して所謂方法と目的の釣合を得可し。且つ假令外部は曲線形を成すものにても其物質剛强にして屈伸に困難なるが如く見ゆるは是亦方法と目的の釣合を得ざるものなり。以上は只最も見易き二三の例を示したる迄なれども常に是等の注意を用ゐば盖し思半ばに過ぐることあるべし

文藝美術

樂典初歩。

夢の屋のやる

新年の本誌附錄に第八號の紙上より私が音樂初歩の講義を致すとの先觸がありましたが私は元來淺學でありますから貴重なるいらつめの紙上で立派な先生達の驥尾に附いて講義致すは如何にも恐縮千萬と存じます。しかし今となりては所謂騎虎の勢で御辭退する譯にもチト參り兼ねますから厚皮ながら責塞ぎの一端に樂典のいろはとも申すべき極の初歩を手短に講義否御話する事に取きめました。ソコデ今回の御話は音樂や唱歌と實地にお學びの方にも第一番に必用な譜表の事、音階の事、音符の事等に止めまして何れ其内日が永くなつて餘暇が出來ましたらば今少し意氣で高尚なところをゆつくりとお話致そと考でござります。

偖西洋風の音樂を學ぶに方りて第一着に必用なもの何かと申せば即ち譜表でござります。譜表とは音樂の譜を記載するの表と申す義にて凡そ樂音の高低長短等は一切此表の上にかきのせて吾人に一目で能く其樂曲の模樣を了知らしむるもので御座ります。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

譜表の効用ハ實地に使用するにつれて自然に分つて參りますから今爰で喋々申述ぶるの無用なるハ勿論ですけれとも一寸撮みて述ぶるハ強ち無益でありますまい。

第一。譜表の法則即ち記譜法を心得まする以上ハ海外萬里ある名人鉅匠の作曲を居ながら其譜に就きて自由自在に唱へ又ハ彈ずる事が出來又吾人の作をも汎く海外に傳へて我が言語文章でハ決して交通の出來ない國人と自由に交際(音樂上の)を通じ快樂を共にする事が出來ます。

第二。記譜法を以て記したる樂曲ハたとい數百千年を經歴するとも又ハ數千萬人に相傳するとも決して其曲体を變更又ハ亡失の患が御座りません即ち其樂曲を千古不易に保存する事が出來ます。

先づザット右の如くで御座ります。全体我邦從來の音樂ハ其雅樂と俗樂とを問ハず、專口授で敎へましたから其進歩ハ實に遲くありまして所謂調子三年とか申して調子の高低を納得致すばかりで三ヶ年もかゝつたとか申します。然るに西洋の音樂ハ極の小供即ち幼稚園の生徒の樣なまだ1 2 3の數字すら解しないものを除くの外ハ一切譜表に就きて敎へますから其進歩ハ至つて速で上等の不器用者でも纔に二三ヶ月程の稽古で「ミーワタセバ」や「ハールノヤヨヒノ」位ハ可成立派に唱へ得ます。此比私の學友鳥居忱君が設けられた東京唱歌會ハたしか三ヶ月卒業と覺えて居りますが此期限ハ如何にも短くありますから彼の調子三年が頭腦に浸み入りたる連中の内にハ餘程魂消て彼是と批評を下す者もあるかの樣ですけれども西洋の音樂ハ日本の音樂と違ひ種々便利な方法がありますから僅々三ヶ月でも双方の勉強次第で隨分好き結果があらふと存じます。況して鳥居さんは音樂の理論と實地とに兼ね通じた先生で唱歌の速成敎授は最も得意で御座りますから唱歌熱心の方々はドシ々々と詰め掛けて御習ひなさるがよろしからふと存じます。オット何だか御話が脇路へ外れかけましたが勝手な提灯持ハ此位に止めて是よりいよ〳〵譜表其物の御話を致します。

偖譜表にハ本譜表と略譜表との二種ござりますから先づ略譜表より申し述べましやう、略譜とは即ち數字にて記した譜の事で御座ります。略譜表を構成まするに必要な材料は重もに左の三種で御座ります。

第一。アラビヤ數字七個即ち(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7)。

第二。(・)「コムマ」及び(-)「ダッシ」。

第三。單縱線及び複縱線。

第一「アラビヤ」數字ハ調子の高低を表するために用ゐる記號で御座ります。シテ毎に其數の最小な數字即ち(1)を以て一調の基礎音即ち最低音を表します。故に(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7)と數字の數の增加しまする程其表したる音ハ段々に高くなります。又此數字は(1)は「ヒー」、(2)は「フー」、(3)は「ミー」、(4)は「ヨー」、(5)は「イー」、(6)は「ムー」、(7)は「ナー」と稱します。

第二「コムマ」及び「ダッシ」は拍子の長短を表するために用ゐる記號で御座ります。例へバ1,又は2,の如く或る數字の後に「コムマ」を附記したるものは總て短音で御座ります。又1−或ハ2−の如く「ダッシ」を附記したるものは總て長音で御座ります。シテ短音と長音との比例ハ左の通りで御座ります。

1,+1,=1−

又長音短音等の音長即ち歷時は掛時計の振子を標準として定めます。即ち短音の歷時ハ凡そ振子の一振時間に等しく長音の歷時ハ凡そ振子の二振時間に等しきものと定めます。

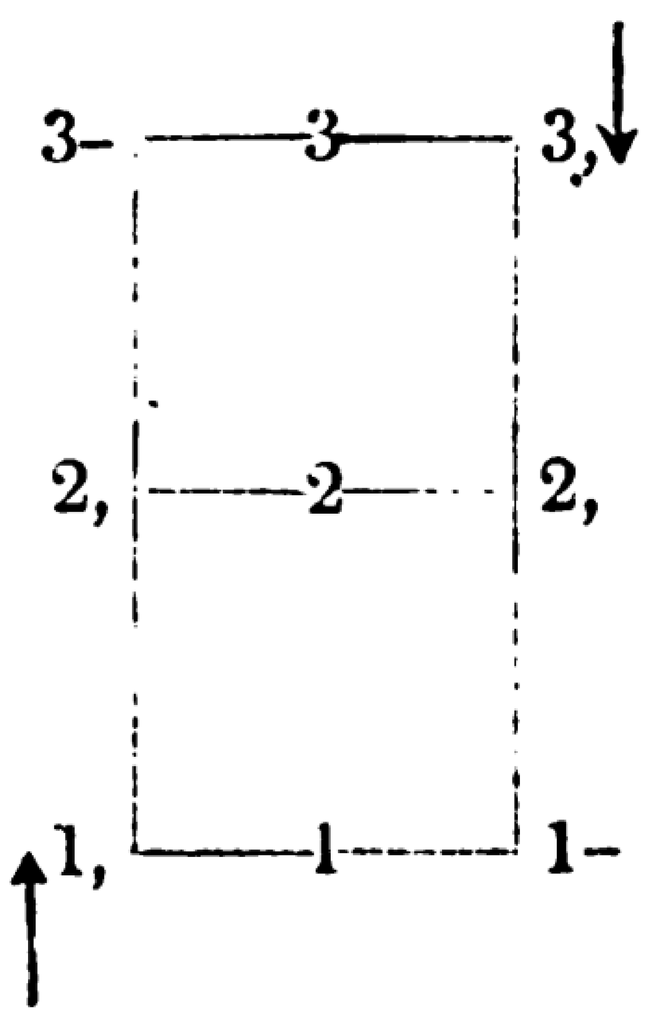
第三　單縱線及複縱線ハ樂曲の小節及び段落等を表するために用ゐる記號で御座ります。但し單縱線を以て小節を表し複縱線を以て段落を表します。

是より右の三記號を用ゐて極短きものを一ッ組立て御覽に入れましやう。但し彼の數字ハ一時に七個とも必ず用ゐるのではなく三個でも五個でも其製曲上に入用な數字だけを用ふるので御座ります。只今作る例にハ(1)(2)(3)の三數字が差當り入用で御座ります。

1, 2, | 3 − | 3, 2, | 1 − ‖

只今作った例ハ御覽の通り纔かに四小節でありますから固より完全の曲とハ申されません。去りし調子の高低（即ち音の配置）拍子の長短（即ち時の割合）等ハ至極規則正しく出來て居ります之を解剖して見まするると、

(a)　調子の高低に於てハ第一小節より第二小節へかけてハ(1)(2)(3)の三音逐次に高く上り第三小節より第四小節へかけてハ(3)(2)(1)の三音逐次に低く下りて居ります。即ち或る調の基礎音より始まりて其第三音に至り夫れより又基礎音に復して終りて居ります。シテ其高低の有樣を圖に顯して見ると丁度階梯を三階昇りて又三階降ると一般のものとなります即ち



(b)　拍子の長短に於ては第一小節には1,2,なる二短音と合み第二小節には3-なる一長音を含み第三小節には3,2,なる二短音を含み第四小節には1-なる一長音を含みて居りますから各小節の音長即ち時の割合は總て平等均一で御座ります。シテ小節と小節との間には單縱線を劃きて其區分を示し、最後には復縱線と施して曲尾即ち段落を示してあります。

略譜表の組立は大略右の如きもので御座ります。諸君が疾く御承知の小學唱歌集初編第一葉の裏面なる教師生徒交互唱諸の教課は即ち此法則で記したもので御座ります。

今度は(1)(2)(3)(4)(5)(6)の六個數字即ち六音の範圍内にて一二の例を組立て見ましやう。

(a)　1,2,|3-|3,4,|5-|5,4,|3-|3,2,|1-‖

(b)　1,3,|5,0,|1,4,|6,0,|1,5,|6,4,|2,5,|1,0,‖

右の二例に於ては特に御注意ありたき事が御座ります。それは音の順次に旋行ものと不順次に旋るものとの區別で御座ります。即ち(a)の例に於ては其五音は(1)(2)(3)又は(3)(4)(5)の如く順次に旋行して居りますから此種の「メロデー」即ち旋律は之を順次旋行と申します。シテ(b)の例に於ては其六音は(1)(3)(5)又は(1)(4)(6)の如く全く不順次に旋りて居りますから此種のものは之を不順次即ち跳越旋行と申します。但し普通の旋律は順次跳越二種旋行の混合より成れるが多き樣で御座ります。偖又(b)の例の第二、第四、及第八小節ある等に「コムマ」と附したるものは音を休止むる事を表するの記號で御座ります。例へば若し一短音時間を全く默止するの場合に於ては即ち0,の如くして之を表し若し一長音時間を全く默止するの場合に於ては0-の如くして之を表します。

次の二例は本邦の雅學と俗學とで御座ります即ち(a)は故加藤櫻老翁が喧しく珍重された越天樂の曲で御座ります。此曲は純粹の雅樂ですけれどもいつの頃よりか今樣お應用されましたから昔の通客は謠曲や俗曲と混同して唱へたもので御座ります。(b)は鳥居さんが毎々名吟を附けらるゝ一ットヤの曲で御座ります。

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

(a) 1—2—|6—5,6,|2—2,1,|2—0—|1—2—|3—5,3,|2—2,1,|2—0—|
6—6—|6—5,3,|6—5,6,|2—6,5,|3—5—|6—5,3,|2—2,1,|2—0—|
(b) 1,1,3,1,|3—4,3,|6,7,4,4,|3,3,1,3,|4,4,3,1,|7—0—|4,4,3,1,|7—0—|
6,7,1,1,|7,6,4,3,|6,6,7,6,|7—1,7,|6,6,7,6,|7—0—|

借零譜表の材料ハ只々數字「コムマ」「ダッシ」等の數種に過ぎませぬけれども日本樂でも支那樂でも西洋樂でも何でも蚊でも意の如くに記譜する事が出來ますから其應用ハ隨分廣大無量なもので御座りまそ。

新年の唱哥(附録の續)

美妙齋主人

すぐれし業をカヾミ餅、
迷夢をケヅりかけ、
眞理の帯をシメかざり、
さて世のカヾミ餅。

鬼もろともに立去れよ、
こゝろの誤謬も。
福もろともに入來れ、
こゝろの賢さも。

花鳥譜(全)

春亭九花

玉なす露の衣つけて
霞の[illegible]に咲き、
世にも薫りつ、仰がるゝ。
愛でたき物ぞ花。

園生のしげみ、野の限、
まひつゝ、謡ひつゝ、
倦みても花の蔭に臥す、
樂しきものぞ鳥。

春の遠山(錦なす)

月にのみ
怨みたりしが、おさぼらけ、
露なき花の香を籠めし
霞の袖にて懐かしき
眉をかくし、

美妙齋主人

漏出る匂もたゞならぬ
端をも人に見せず、
現につれもなき君にこそ。
現につれもなき君にこゝ。

武藏野の山吹

打見ゆる
天には雲のあがささへ
ぞや夕立となりはたり、
夏の雨とて「急がずば
濡れざらましを旅人の
おとより晴るゝ」日和とも
知らでや柴の門に立ちて

伊豫の舍主人

雨のよそひを乞ふ儘に
面ぞゆげなる賤の女が
出だすもうしや山吹の
黄金色そふ一枝も
みの一だにあらぬてふ
意辞と知りて却に
學の行をふみなれぬ

健男が顔でもみぢなる。
文の林にさける身は
七重も八重も山吹の
花も匂へり實さへまた
今ハ結びて武藏野の
千代田の城の千代までも

かゞやしき名や
かをり行くらん。

右うへし

武藏野の野路の山吹一枝は
文の林にかをるとなうも。

下總なる藤澤村を過ぎて。　伊豫の舍主人

今ハ昔となりにけり、
後醍醐帝は日に月に
ゐやしきまゝなる鎌倉の
執權職をうばはんと
はやる心もほにいでゝ
いつしか悟る六波羅の
なさけ用捨もアラシ夫が
不忠の刃に是非なくも
隱岐にうつりて承久の

昔と今に學びしは
なげかはしさの餘なり。
かゝる折しも百敷の
大宮人はにげのくれ、
身をのみ守る其隙に
藤房卿はたゞひとり、
忠義の的となりにけり。
帝安けきいさとしも
君にてそよれ、よれ君な。

新形の封袋。

前號に御約束いたした新形の封袋と猶精密にくらべて見ましたところ、新形と申しても別に其形は在來の物に違ッて居りませんで、たゞその摸樣と色合と書法との違ふのが此新形の名を受ける原因です。さて此新形の封袋ハ都合三色ありまして、即前にも申しましたとほり、第一ハ摸樣の新形、第二ハ色合の新形、及び第三ハ書法の新形です。

何れも時候に相應した摸樣や色合と封袋を用ゐますることで、まづ珍らしいとハ申しても宜うムいます。第一の摸樣の新形と申すのハ一年十二ヶ月或ハ四時に因りて封袋にあらはす畫樣或は花飾を違へますことで、誰がそれと作始めたかは知りませんが、隨分不風流な形もありますから、こゝでも記者がそれに喙を容れて訂正しましたのを述べましやう

一年の月々により、摸樣を變へますれば次の通です。

一月	日の出に鶴。	七月	百合に蛩。
二月	梅に鶯。	八月	蓮に蛙。
三月	桃に駒鳥。	九月	女郎花に鈴虫。
四月	櫻に虻。	十月	菊に鶉。或ハ落葉に厂。
五月	卯花に杜鵑。或は牡丹に蝶。	十一月	枯枝に鴉。或は紅葉に椋鳥。
六月	菖蒲に蜻蛉。	十二月	枯葭に鴨。

右いづれも薄靑で濃厚ではありません。色々に作れば

此上にも猶取合が出來ます。
次に又四時に因りて摸樣と變へますのハ
春　朧月。　夏　木立。　秋　木實。　冬　雪。
是ハ前にも變化がございませんから費用も少うムいます。
次は色合によりて模樣と變へますのハ次の通です。
一月　青柳（綠）。　二月　紅梅（蘇芳）。　三月　菫（紫）。
四月　櫻（くれない）。五月　山吹（山吹色）。六月　杜若（藍）。
七月　百合（猩々緋）。八月　紫苑（紫苑色）。九月　桔梗（紺）。
十月　菊（深黄）。　十一月　紅葉（大赭）。十二月　雪（白）或は朽葉（朽葉色）
右いづれも封袋の色合で濃も淡もそれハ人々の勝手です。
又此色合の四時の形ハ
春　紅。　夏　綠。　秋　黄。　冬　白。
さて第三の書法といふのハ外でもありません、前の月々の色合によしたがつて宛名や差出人の名と其色で書くことですが是ハあまり好いことでもありますまい。
處で其形の体裁だけハ述べましたから是からも夫につき一寸一理屈申しましやう。色紙と手紙に用ゐますのハ失禮だといふ習慣もムいまして凡の白紙の封袋と用ゐるのハ只今の禮ですか、是ハ左樣として貴人が初對面の人又も哀傷の向へ差出す時よれみ用ゐ、跡ハ一寸戯ながら右の摸樣或ハ色合のものを用ゐますのハあながち興が無くもありません。御承知のとやり日本でも昔は紅梅の衣とか落栗の衣とか言ッて其時節に應じて色々な色の衣と着けましたが後にハ全く其風も絶ゐて居りました後世の人をして其優美な點とバ坐に羨ませます。今封袋に全じ樣な制式と用ゐ、何月と書く所をば色合や摸樣で色解らせるやうにし、其時々に應じて右前に申したやうな体裁の物を用ゐますのハ暫時面白いことです。そして摸樣にもせよ色合にもせよ、右に述べた所の物なぞハ既に大方出來て居りますゝら何所の封袋屋へでも御出でなすッて御見立なされても自由です。すこしハ此東京にある人の中で是を用ゐて居る人もあります。

雜書。

女子の心得べき技藝の多き中に其美術に屬する者は先和歌、音樂、繪畫の三とす。和歌の事も既にいらつめ第一號に其稽古の仕方と載せ置きたれも其意匠にあらひて試みたる讀者もあらん。又前章音樂稽古の仕方も其道に堪能なる上眞行氏の工夫に出でし事なれも初學の人といへとも之と精しく讀み給も

ば必餘師なるべし。和歌音樂は已に學びの緒に就きしも繪畫に至てはいまだ之が稽古の仕方と載するの運に至らざりし。和歌音樂繪畫は美術の三姉妹といふべし。女子たるものは此三姉妹と己が朋友となすにあらざれば人品自ら高尙ならず万事調子外れの舞振多かるべし。但し舊來の敎育を受る人々にても和歌と音樂の稽古となしたるもの多かるべし、併し繪畫は職業の爲か或は格別の數奇者にあらされば稽古するものなかりし。此仕來は尙今に存して繪畫の女子に必要なるは和歌音樂に同樣なりと心得る人少し。故に新敎育法行はれて何れの女學校といへども必 繪畫の科を設けられたる今日と雖も唯規則なるが故に是非なく稽古する人多し。何事も現在なし居る仕事は何者なりや又何の益に立つものなりやといふとを知らずして唯餘義なく爲すといふより面白味なきものはなし。面白味なき仕事は成功少し。故に繪畫の稽古を始むる前に繪畫の實用を一通り心得置く事必要なり、稽古の仕方に付きての考案も熟し居れば追々揭載するととすべし。先今回は繪畫の實用に付き一言し置くべし。

繪畫を稽古するに三段の別あり第一段は 專 臨本に向ひて模寫するなり。第二段は目前に來る實物を寫取るとにて寫生寫景をなすなり。第三段は自己の意匠より未だ嘗て見ざるの物若くは未だ曾て踏まざるの景色を畫くなり。繪畫の稽古は必ず此順序によることとなるが第一段即ち臨寫をなすは寫生寫景、想像畫に入るの豫修にして專ら用筆法、遠近法、透視法、陰影法等の理論を學ぶなり、さて此稽古の順序に於て第一段を卒りて然る後第二段に移るは從來の敎授法なるが斯の如くするときは臨寫法のみを學びて直に其業を廢する者なり、畢竟第一段は仕事を爲すの道具を得るが如きものなれば臨寫法のみを學びて稽古を廢するは恰も道具を得て仕事をなさゝるか如し、故に第一段と第二段は兼ね修むるを最 利益ありて最面白味多き方法とす、たとへば臨本に就て机と寫すとと學び兼て遠近陰影の工合を學び置き直に實物の机を目前に措て之を寫すべし、其他人物景色を學ぶも亦仝じ、已に臨寫寫生を學び得たる後第三段想像畫に移るべし。是に於て一般女子の學ぶべき繪畫の能事畢ると云べし、さて其効用にも間接と直接の別あり、間接の効用より申さば繪心ある人には目前に來る諸物を疎畧に看過さぬ風と記臆を確にする風あり。譬へば一の花を見ても葉の色は何、花の色は何又花の位置は何、枝態は何、瓣は何枚蕊は何本などゝ瑣細なる處まで氣を付けて見る

は繪心なき人にハ稀なる事なり。畢竟繪心ある人ハ何物に接しても之を寫し取るの心を以て見るが故にかく綿密に観察の行届くなり。綿密に観察したる事物ハ之を記臆することもまた堅固なり。普通學の敎課として繪畫を敎ふるハ專ら此等間接の用にあることなり。

畫學は唯物の眞を寫すのみならず物と物との相關係する位置に付て敎ふるものなり。故に繪心ある人は位置按排より生ずる趣味を解し得るなり。家内の装飾をなすに當りてハ此趣味を解すること甚必要なり。同じ器物を用意しながら其按排のよろしからざるときは全く俗了することあるものなり家内の装飾ハ一種の趣味を帶ぶるときハ人をして其心掛の奥床敷に感せしむ是等もまた繪畫の餘德といふべきか。

次に繪畫の直接の効用を述べん。直接の効用は數へ盡し難しといへども其婦人方に切なるもの一二を申さば珍しき物を見るとき又は麗しき景色に逢ふときは其荒増を手帳などに見取して存するときハ其當時無限の樂あるのみならず過ぎ去りて後に手帳を繰返し見るときハ遠きものも目前に來り過ぎし事も再び現じ其樂ハ格別のものにて、見し事も聞し事も雲烟過雁と一様に去りて痕を留めず從て平素の説話索寞味なきものとは自ら別なり。

繪畫ハ博物學との關係甚だ密なり。博物學は有生無生を論ぜず鳥獸虫魚草木より礦物類に至るまであらゆる自然物を研究する學問なり。諸學問の中何物か最女子に適するやと云に此博物學に超ゆるハなし。而して博物學は繪畫の力を假ること最多し、たとへば珍禽奇卉を見ることありとせよ之を記するに筆にてハ形様し盡す能ハざる所あり、草花の如きハ之を乾製して貯ふることありといへども其色澤の如きハ必褪却て日經て後想像し能はざることあり、かゝるときは兼て寫し置きたる圖を觀るときハ眞物を觀るの想あらしむべし。其他博物學の上に有する繪畫の効用ハ其道を辿りて後知るべし。

博物學ハ專攻の學問として女子に適當なるのみならず一般の女子の必心掛くべき學問なり。兒童の智識を得るも其身邊を圍繞く万物よりするを多しとす、兒童ハ智力いまだ微弱なるが故に徒に高尚なることを以て之に敎ふるときは多くは之を賊ふ者あり。たとひ高尚ならざるも實物を示さずして説話をなすときはまた其腦裡に入りがたき者あり、故に兒童の時殊に家庭に在る間は必何物と見ても疑を起して母に尋ぬるものあればハ母たるものは其疑を起すに乘じて其物を圖して之

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

と說べし、兒童之繪畫を喜ぶものあれバ熱心に母の話を聽べし、此際に母より得たる智識は後來學問の根據ともなるものなれバ母親たるものゝ博物學の智識なかる可らず、而して博物の智識は繪畫を竢て其用を全うするものなり。繪畫の用ハ隨分廣きものなるが女子に取りて之家庭教育に要するより急なるものはなからじと考ふるなり。其他繪畫の日用に便利を與ふること少からず玆に事々しく述ぶるに及バず。

以上は專ら自在畫に付きての話なるが用器畫もまた女子を益すること一樣なり紋形摸樣の如き規則正しき畫は皆用器畫にて學び得るなり此畫法を心得るときは編物、刺繡、縫綴等に要する意匠を助ること大なり用器畫は之を學ぶに甚困難なるものなるが之を容易に學び得るの新案を得たれバ追々掲載することとすべし。

學藝

炭薪を儉約する法。

國の貧富は石炭を費やすことの多きと少きとに由りて測るべしとは工業家の金言で、それ故家富を圖榮ゆるに至れば炭薪を費やすことも多くなるは自然の勢で、我國でも炭薪を費やすことの多くなるを希ふは記者の素願です。今ま丶に炭薪を儉約する法を說くのハ敢て炭薪を用ふる途を狹めんといふではなく、唯務めて少量の炭薪を用ひて望む所の目的を達させやうといふ事です。

炭薪を用ふるの目的ハ之を燃燒してこの時に生ずる熱を使用することで炭薪が燃えて熱を生ずるのハ炭薪中の炭素と水素とが空氣中の酸素と化合して炭酸と水とを生ずるが爲です。炭素と水素とが酸素と化合して生ずる熱の量ハ常に一定して居ります。語を換へて言へば百匁の炭の中にある炭素の量には定まりある故に其炭素が燃えて炭酸となるの量もまた一定し隨て此時に生ずる熱の量もまた一定して變りません。

然るに百匁の炭をひちりんで焚く時は火鉢で焚く時よりは火力も强く煮炊の力もまた多く、更に同しく百匁の炭を埋火となす時は少量の湯をさへ沸せません。炭の燃ゆる爲に生ずる熱の量が同じくて煮炊の力にかく强弱のあるは何故でしやう。ひちりんの炭が酸素と化合して炭酸を出せば其炭酸は熱せる故に火焔と共に上に昇り、空氣はひちりんの口より入て空氣中の酸素が炭を燃やし、炭隨て燃ゆれば空氣隨て入るを以て炭の燃ゆることが頗る速です。埋火は之と違ひ四方より

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

灰に覆はるゝ故に炭が酸素に觸るゝことひちりんの灰の如くでなく、僅かに灰の間隙から入る所の酸素が灰と化合するゆゑ炭の燃ゆることが頗る遲いです。されば埋火とひちりんの火との差は燃燒の遲速にあるので燃燒速なれば煮炊の力強く燃燒遲ければ其力弱きことは明です。これに由て考ふれば炭薪を用ゐるには其燃燒を速ならしむることが緊要です。

然るに世間には往々燃燒し難き炭薪を用ゐるを儉約なりと心得違ひたる人ありて、よく乾かざる薪は「むだ燃」して「こたへ」惡しく生薪は「だめ」ありて「こたへ」よしなど言ふことがある、これが大なる誤りです。炭薪を燃して唯其燃ゆるとの長いのを望まば燃え難き炭薪を擇み、また其熱を使ひて煮炊を爲やうとならば燃え易きものを擇み、且之を燃やすに適當なる裝置を用ゐるが宜いです。ひちりん、焜爐は煮炊の爲に炭を燃やすに適當なる裝置です。從來多く臺所の首座を占めて誇り顔に下女に向て烟と吹出す所の竈は其構造道理に適はず無益に薪を費やすことが多いです。此類の竈は初めて火食を學ばざる野蠻人が地を窪めて枯木を燃やしたる時代の竈と其形等しくして、薪中の燃ゆべきもの分幾は烟となりて室內を汚し、又人の氣管を害することが尠くありません。これ專ら空氣の入る門と炭酸の出る口とを違へぬゆゑ薪の燃燒を全ふすることを能はざるが故です。今此竈を改良せんには焚き口を狹くして適當の位置に烟突を作り空氣の入る所と炭酸の出る所とを分つので、烟突は唯炭酸の出去る道ばかりでなく、また竈內に空氣を引く能があります。幸ひ世間にかく改良した竈を鬻ぐものがあります即ち改良宇都宮竈です。

假りに千圓の歲入ある人が日々若くは月々に得る所の金錢を費用し盡して聊も餘す所なき時は千圓の金は唯衣食の料となるに過ぎず、其他に用を爲すことはないでしやう。然るに毎日若くは毎月幾分の金を餘し漸く貯へて數百圓に達せる時は、其金は更に利足を生ずべき公債を購ふの資ともなすべく又商業工業の資本に供へられます。故に金錢は纏りて後初めて用を爲すものです。此理はまた炭薪の熱と使用するに適應られます。即ち埋火とひちりんの火との生ずる熱の量は同じけれども、ひちりんの火は數十分時間に若干量の熱を生じ、埋火は數十時に同量の熱を生ずる故にひちりんの火熱は纏りたるを以て煮炊の用を爲し埋火の熱は纏らぬが爲に用がないのです。

叢話

鼠おとし。

鼠おとしへ入ッた鼠が四邊を見返り、

「おイ何故、私を閉籠めたのだ。早く逃がして御呉れ」。

鼠おとしも些しも騒がず、

「だが何故御前も此處へ入ッたのだ」。

「でも腹が減ッて居て、而して見れば御前の中に甘さうな魚の切が有ッたから」。

「それも自業自得だ。魚を食べるとき御前がそれを引張ッたから那の戸も閉ッたのだ。私の知ッた事でもない」。

「けれど御前が私を誘ッたから私も食ひに來たのでもないか。ま、それも宜いが、兎も角も赦してくれ。もう是から決して來ないよ。

「どうでも御爲。來れば閉籠めるまでの事さ。が、全体私は御前を誘ひは爲なかつたよ。私は御前に何とも言はなかつたよ」。

「まだ、そんな事を言つて居る。宜いから、まア、逃してくれよ。何も御前には私を閉籠める權利は無からう。私は御前にまだ歹い事は爲なかつたよ」。

「歹い事は爲なかつた。誰の魚を御前は取つた。御前はそれを盜んだらう。私には權利が無いと。御前に魚を取る權利が有るかえ」。

「ある。私だとて命を繋がないでは……」

「命を繋がないでは……御挨拶有難う。御前が居ればこそ臺所も騒々しい」。

「けれど居たとて宜いではないか」。

「何故。はイ承りましやう。どういふ譯で居たとて宜いのだ。人の作つた家を押領し、人の食べる物を掠取り、それで……へゝン……いや隊長、鼠將軍」。

「そんなに冷かさないでも宜いやね。全体そんな不正の手段で人を捕へるのは極めて卑怯だ」。

「逃がしてくれろと言ふのは卑怯では無いの。盜みに入ッたのは卑怯では無いか。人の事を言はないで自分の穴を見るが宜い」。

「けれど私おも命を繋いで宜い道理が有るよ」。

「はゝ、今に爲て考附いたか。どうして命を繋いで宜い」。

「私は斑猫を食つて人の害を除いて居る。是だけの義務は

盡くして居る。だから其報酬として命を繫ぐ權利はある。命とつなぐそのために食物を取る權利もある」。

「そんなら何故斑猫で命を繫いで居ないか。斑猫が天賦の食物ならそれさへ食べて居たら宜いだらう」。

「が、それが面倒だね。今食べた魚が惜しいなら御前に斑猫を上げやうか」。

「甘口は御無用です。私は此處へ入るものを捕へる義務を持つて居る。その外の義務をば持たない。他に加へただけの害をば身に負ふのが世の常だ。幾許左樣喃んだとて私の身体は鉄製だ。破れるなら破つて御覽。それ見ろ、私の主人が來た」。

「あ、もし、旦那、もし旦那。えイ貴君火箸で私を……もし旦那……あ、痛たゝゝ……突いては……旦那……あ、痛たゝゝゝ」。

批評

交際の栞。山崎忠興氏譯、金港堂出版。原書は獨乙人江、み、い、る、呂ッ、氏の著なるを山崎氏が抄譯して交際の栞と題したのです。如何さま紳士や貴女の交際の心得となる事もあります。が、しかし疎漏な書方です。第二ページ「美」は自然の法則に從つて發達したるものといふ說は無論至當の事ですが、それだから「もつとも巧なる彫刻師は力めて天然物に摸倣するを以て彫刻の秘術となし、又もつとも巧なる繪畫は實地と寫眞したるに如くはあらざるなり」と論を結んだのは如何にも唐突ではありませんか。天然物に摸倣したるものばかりがはたして最上の美術ならば、名工が如何にも美事に刻んだ支那婦人の足形はやはり取るに足りませんか。大家が腕を揮つて描いた蜂腰の美人の肖像はやはり佳はありませんか。よもや左樣でもありますまい。畢竟この結論と前提との間には猶多少の注解がありませんでは、失禮ながら其意味は先無茶苦茶で厶います。其處で其處に注解が挾まつて此疎漏だけは免れたにもせよ、純然たる寫眞派が眞の「美」を成すものといふ說には猶左袒が出來ません。しかし其等の細かい事は審美學の問題で、それを此處で言ふほどの必用もありませんゆゑ、此段は是で終に爲ます。

其外には「貴女に對する心得」といふ中に貴女自身の心得などが澤山入ッて居たり、又は貴女の身の爲になる心得は紳士の身の爲になる心得より不平均に少なつたり、又は「長袖善舞」といふ、東洋の諺を用ゐ、或は「獨逸の哲學者カント」などゝさながら外國の人が譯した体裁にして置きながら不意にまた太く原文に拘泥して譯したり、凡此類の疎漏は隨分澤山あるやうです。

舞踏の事が可なり澤山ありますが、是は我輩には不案内のことゆゑ評しませんが、强ひて希望を申せば波蘭舞にせよ、四對舞踏にせよ、圖を入れていたゞきたう厶いました。圖が無くては些まだ…

女子敎育新論。文學士天野爲之氏序、經國學人中山整爾氏著、東京神田西福田町伊藤誠之堂出版。

天野氏の序ハ先無難な作です。此序と卷首に冠らせた著者の御心ハどう言ふものですか、記者にハ分解難ねます。中の分類ハ叙言、總論、婦女の性質、その權利、その職務、男女の關係、母兒の關係、及び女子敎育などで、其論の大主眼ハ婦女の性質ハ其實男子のと違ッてハ居ないのが、習慣や敎育のために壓制せられ、終に今日のありさまを現したもの」といふ事で、それう、權利も全じであるべく、職務も全じであるべき事が至當だといふ決論を付け、さて「今迄の習慣を打破るにハ其敎育を奨勵するより外に手段ハ無い」と斷案を下してあります。今日の女子のためにも敎育が必要だといふ處ハ何も新らしい說でもありません。前の「男女の性質も互に違ふ譯の物で無い」といふ說も極めて新奇といふ程でも有りませんが、隨分御骨折の事でしたらう。

全体の處に於ても記者も全意する件もあり、また全意せぬ件もありますが、猶一篇の論文として讀めバ誰でも幾分か參考になる事もありましやう。

俠美人。依田百川氏著、東京本町三丁目金港堂出版、第一編第二編既發。

初編に中根淑氏の序がありますが、如何にもその句法は著者の物に似て居ます。序でもやはり中を褒めてあるのみです。さて此書はまだ終結ともなッて居ませんゆゑ、實はそれが殘らず出る上で評しやうと記者も思ひましゝ故、たゞ今まで默ッて居ましたが、切りに諸方の人々から催促が有りますので、止むを得ず既發の二編に就てあらまし評と下すことゝなりました。其故、深く言ひたいのも猶扣へて置いた處もあります。

はじめ依田氏が新評戯曲十種を評された時にも記者も坐ろに敬服して居ました處、吉野拾遺名歌譽が出るに及んで記者の昨日の敬服ハ無殘にも痕形が無くなッて「吉野拾遺」といふ聲を聞けば毎でも冷笑が出るばかりの有樣となり、今度の俠美人なども詰らぬ物に違無いと最初ハ思ッて居りました。處が今度ハそれほどでハ無く、冷笑も、些出る、勇氣を失ひました。

俠美人ハ純粋の時代物語で主人公ハ清水清子といふ女丈夫その對ハ細谷小三郎といふ豪傑。如何にも一對の好配偶と受取れます。初編に小三郎が姦盜を智畧で殺した事がある、その照對として二編に清水清子が矢張り謀計で强賊を殺した事が載ッて居るのハ流石巧な反映です。小三郎が依田氏に向ッて一種の奇論を言ふのは何處と無く清子が新說と吐くのと似て居たり、又は一寸前に伏線があり、或は襯染が出て居れば必それとの契合が後に出て居るなどは、著者が漢文の敎育と受けられた名殘とは言へ、一方に於てはまづ綿密に注意して書かれた處が見えて居ます。と言へばとて記者は馬琴翁や何かの樣に是非とも小說に襯染や伏線の八法が備はつて居なくてはならぬと主唱するのではありません。たゞ依田氏の此作には注意が綿密に行屆いて居ること、此頃矢鱈に世に出る我樂多小說の類では無いといふだけを褒めるのです。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

扨是からは細密な處へ立入りましやう。第四頁に「一大小の長き方と玄關に脱ぎ置き、脇差の方を膝のほとりにさし置たり」とある、是が蛇足の句でしやう。

第六頁に「師は人と物語する時、笑ひたまふこと多し。これは其人を嘲り笑ひたまふにもあらず、又媚を求めんとて爲したまふにもあらず、天性柔和にして自ら胸中に樂しと思ふ處あればなるべし」とある、是がちと牽強です。天性が柔和ならば何故に胸中に樂しい處が有りますか。記者には分解りません。是等の人物は多く世にあることで、實に嘲るにもあらず、又は媚ぶるにもあらず、只の癖で斯うなのです。何も天性が柔和ゆゑ笑ふ譯はありますまい。

第二回の末より第三回に亘り、清水清子を引出すために玉川桂之助を點じ、艶書の返答の有様で清子の氣象とそれと無く現しゝ工夫は珍らしくはありませんが巧です。去かしながらその返書の文言は如何にも脱俗の論で、今日の女子ならばいざ知らず、專制政治の下にあッて儒教主義の中に押込られ、その壓制を受けて居ゝ當時の婦人の口から云ふ此樣な議論の出るといふことは些覺束無いではありませんか。「親のゆるしありとても自からあなたこなたの心合はざれば辭申すこと又世の習にて咎むることも聞侍らず」とはあまり時世に背いては居りませんか。なるほど清子は學問もありましやう。見識もありましやう。その學問もあり見識もあるために時世の眞面目を見謬ッて居るのですか。學問もあり、見識もありながら、何故清子は知りませんでしたらう、「心合ざれば辭む」といふ事は此時世に最も少かッた例、實に地を拂ッて無かッた風習だとはいふことと。それも遁辭として言脱ければ此時世にも千人の中一人ぐらゐは其主義に背かぬ者もあッたと言へましやう。けれど時代物語の眼目は其點にはありますまい。縱哉有つたとしても間違でしやう。吉野拾遺名歌譽に於ても辨内侍と伊賀局との語氣の中に矢張り是と仝じやうな奇怪な處が有りました。是は何から起るといふと、間違ひましたら御免なさい、新主義を無理に古人に用ゐやうといふ一點から生ずるので、時代物語が人氣を受るに困難なる其一原因は此處にあります。されば迚て記者は此時代に有爲の女子は一人も無かッたとは申しません。清子さんも居ましたらう。清水孃も居ましたらう。けれどそれを書現はすに於ては力めて本然の特質を失はず、其間おのづから其固有の本色が見ゆるやうに爲た處で始めて巧とも言へましやう。是等は例を引くまでも無く、西洋の大家の作ッた物を一部でも精密に讀明らめれば直に分解る處のものです。惜しいことには本傳の清水清子は此一點に於て一番拙に見ゆるやうです。御覽なさい、文章にこそ安政頃の人間だと清子などを斷ッてありますけれど、假に眼を塞いで清子の擧動をのみ見ればそれが實に其頃の人物とは見えぬでしやう。是で完全の人物が描出されてありますか。是で時代物語の純粹なのが組立てられて居ましやうか。勿論是には著者もまた苦心なさッたと見えて、力めて温柔の姿を示させたり、又は其議論の風をば、今日の風で御書きなさいませんでした。が、注意の甲斐は其處だけです。ある作者の言葉を假りて言へば清子は例の妖怪です。

是と同じ例ですが、小三郎が依田氏に紹介と云ふて清子に面會する趣も矢張り新主義を無理に吾人に應用した失策です。

清子に辞まれて玉川桂之助は恚ッて嫉妬の心を起したといふ趣、小人の心、實にそれに違はありません。そして桂之助は其鬱憤を晴らすため山村武雄といふ塾友の口から根無事を言觸らさせます。是は歹くはありません。が、其武雄といふ者は更に此小説に重量の無い人物です。勿論三編などに至ッて是が應分の役に立つ者ならば記者は何も申しません。たゞ、もし是が訛傳を傳へるだけの人ならば記者ハ著者がそれを事々しく素生まで擧げて現しるのを笑ひます。是ハ三編が出る上で猶兎角を評しましやう。只一寸爰に言いたい事が有ますが、それハ第七十九頁に武雄ハ氣早の者だといふ趣があるので、此小説にハどうして斯う氣早の者ばかり多いのでしやう。三郎前にハ三郎左衛門もあり、後にハまる此武雄も有ります。三郎左衛門の氣早なのハ如何にも二編にそれが自殺する事や其他彼是の處に關係が有りますからまづ惡くハありません。が、この武雄の如きものハ別にそれが氣早であッたからとて大した關係ハありません。なるほど武雄も讒言をも信じ、讒言をも為ましたらう。が、これは必しも氣早ばかりの故では無く、何方かと言ふと全く實に思慮の少い處から起ッた事でありましやう。それも其氣早であッた事が前の三郎左衛門のやうに本傳に餘程の關係があるものならば別に差支は無いもの丶、只武雄の所為は訛傳を傳へるばかりの事で、それがためには氣早だとあられしたのハ些御報謝が多過ぎます。更に一層手強く希望を申すなら、この武雄は思慮も無く氣早の者だと言ふことは實に所謂訛向で是ではまざ〳〵として假作物語めき、興も却ッて少いです。これをもし左樣でなく武雄ハ思慮無いものでも無くまた氣早の者でも無く、そして玉川の計策も行はれさうで行はれず、行はれさうでなくて行はれるやうに作做為されたならば愉快は實に無限です。あゝ惜しいことでした。

清子が如何にも其時代の婦人らしく無いとの趣も既に上にも述べましたが猶今一ッ見過ぐし難い處がありますので重復ながら更にまた一寸申しましやう。第二編の第十七頁に「又さらに小三郎が火中に入りて己を救ひたりけるその日の景狀を言出で丶、勇氣撓まぬ心ざまと義によりて命を惜みさまはざる上なき氣質は淺き女子の言の端には言盡すべう侍ふずといひかけて側にそむきてそと拭ふ涙に誠ハ見えにけり」といへる、是が想像上の事實です。小三郎が火中に入りて清子を救ふてくれたのにハ違無く、無論清子もそれをバ有難いと思ひましたらう。が、其處です、其處に奇妙な事實が有るのです。自分嬉しさハ身にあまるほどでも先方ハ男子でしやう、而も自分が身を寄せても宜いと思ふ男子でしやう。それへ向ッて禮を述べる時には實に人情の本色として緻密にそれを言出すのは尤難い處の物で、殊に面と面とぶつかッて先方の人を褒めるなどの言葉は迚も口から出ぬものです。是は女子ばかりではありません、男子でも是情をば持ッて居ます。如何ほど自分が愛敬する人でも其交際の間に於て（親子兄弟なら兎に角）先方の人を目前で褒めるといふことハ或ハ諛りと見られハせぬ

ろといふ怯心に制せられる儘に中々言ふに難いものです。男子に於ても既に左樣です。殊に况んや其邊に於ては愈女子の特異の點が有るのですものを。思ふに此時の清子の有樣はたゞ洪恩なり／＼言葉では述盡くされぬ由を述べ跡は小三郎の勇氣と俠氣とを感ずる處は何とも無くその擧動に於て見えて居たとの趣に書做せば無量の味は、左樣です、言ふに言はれぬ微妙の情は其間にあらはれます。それを斯う書かれたのは多分馬琴翁や種彦翁の純鹽派の筆法に從つて思はず爲されたことでしやう。だから是は想像上の事實でしやう。治作が小三郎を牢から救出すに獄卒を酒で暗ませて策を行ふた体になつて居ますが、あまり陳腐な趣向です。此樣な趣向には大木の黴が生えて居ます。

重立ちた脚色の評論は既に下しましたから是からも記者も筆を改めて文体の評を爲ましやう。

吉野拾遺名歌譽の文は實に支離滅裂、人をして嘔吐を催はさせる物でしたが、此俠美人はそれよりは遙に秀れた處の物です。去りしながら記者が第一に不快の考を起しましたのは此小說の文体が所謂間接体（ゐんだゐれくと、なアらちイぶ）であるのです。間接体であるのは決して惡いとは申ません。只此類の小說は間接体でない方が却つて面白く思はれるのにそれを故意々々間接体に書かれたのも些千慮の一失に近いかと思はれます。俗語を以て應答の言葉を書現しそれも感動を強く與へるには益は無くも無ければど、如何にもその語氣がゐやしい故、それを用ゐなかつたといふ樣な、見識の狹い處から此樣な文体を用ゐられたなら記者も最早、一言も評を下すのを屑いとも思ひません。が、著者も世に聞えた文壇の大家です。この樣な淺薄な考をば持つて居られないことは記者も蔭ながら思ふて居ます。それで此文体が出たのですものを。記者も今更白川氏が何故この体を用ゐられたか、もつとも不審に思ひます。思ふに依田氏が此文を用ゐられたのも、一時の興に出た事で、此文の麗質をも見せやうとの御心で書かれたる事でしやう。もうそれならば記者も是から其心得で評しても宜いでしやう。大概の新聞紙も依田氏の此文をば「流暢にして風致あり」など單順にも評して居ます。が「流暢」は此頃流行の句で、その普通の意味に從へば生煎の梅田牛房も生燒の薩摩芋もまた流暢な食物です。依田氏の此文は實に流暢ですか。記者は此文をば勢の無い一種の文、悲哀、滑稽、跌宕、美妙などの變化に因つて些しも變せぬ一種の文と心から信じて、信じて居ます。文の体裁を古文に比べて言へば馬琴風で、また馬琴風でなく、京傳風でまた京傳風でなく、さして至る處として妙句や妙文のある處は無く、僅に意味が通じて居るのです。僅に意味の通じて居るのが流暢かも知れません。生煎の梅田午房でも、生燒の薩摩芋でも食べるには差支はありますまい、意地穢には。食べるに差支が無い處から是等も流暢かも知れません。

ある新聞紙の記者は斯う言いました……「修辭の點に於ても秀れて居なくては完全の小說では無い」と。評者も全樣な意見を持つて居るのです。たとひ脚色は可なり見事に出來て居たにもせよ、この俠美人の樣な文章では完全な物とは言へません。飾粧も無ければ活動も無く……。

其一例として修辭上の誤謬を一二出しましやう。初編第二十三頁第七行に「忍出る」とあつて第九行に「跳出る」とあります。「忍出る」の語は「隱密」といふ考を我々に起させます。「跳出る」の語はそれと反對の考を我々に起させます。賊が「忍出る」とあつて直に跡から他の人が「跳出る」とあれば勢後者の擧動は前者に悟られる譯でしやう。處が事實は左樣でなく、賊は之を悟りません。是も可笑しいでもありませんか。否、實に訝しいのです。是をば何うしても改めて「跳出る」をば猶輕く爲なければ疵は決して無くなりません。

次に第二編、第八頁、第四行に「車輪の如き火の粉飛散り」とある、是が不思議です。「車輪の如き炎」とは言へますが「火粉」とは別製です。如何に火の粉が大きいとて車輪とはあまりです。多分は馬琴翁の句に「車輪の如き炎を飛ばせば」とある、此句を直に御用ひなされて此御手製が出來たのでしやうが…

次に前にも引きましたが第十七頁第五行、「勇氣たゆまぬ心ざまと義によりて命を惜みたまはざる上あさき氣質は淺き女子の言の端にはいひ盡すべう侍らず」とある、此處に惡い處が有ます。右括弧の中の文句は淸子の口から出たのでしやう。ならば「心ざま」では失禮です。是非とも是は「御心ざま」で無くては下の「をしみたまはざる」の「たまはざる」と權衡が取れませんでしやうが。更に其次に杜撰なのは「淺き」といふ形容詞です。是は「女子」に係るのでしやうか。それでは意味がわかりません。「言の葉」に係るのでしやうか。それでも意味が通じません。ならばこの「淺き」の屬する處は此文にありませんか。思ふに是は「淺き心」と古文にある、それから作出された新句でしやう。が、「心」を省かれたからには無論役目の無い形容詞です。

一斑の美ではなく一斑の醜は此通りです。それゆゑに依田氏の俠美人は文章に得て居ません。因ッて完全な物ではありません。脚色は其時代に實に有ッた事項を脫化して浩做された件が多く見えますが、まづ拙ではありません。文章に至ッては…左樣最早言はずとも諸君は既に御承知でしやう。今此評を終るに臨み、最一言ふことが有ります。第一編の最初の繪樣が本文と合ッて居ません。本文には細谷小三郎が羽織を着て居る趣には些しも書いて無いでしやう。それで畫には羽織を着て居ます。如何です、是は故意と爲さッたのですか。

まだ有ります。最一條の評が有ります。全篇すべて假名遣が…ね…讀者諸君も既に御承知でしやう。如何です是も故意と爲さッたのですか。

第三篇が出た上で、或は全篇が團圓になッた上で、猶事に因ッたら更に細評をいたしましやう。記者が妄評を加へましたのも全く文學のためにとて爲た事です、それゆゑに成るべくは御示教を願ひます。

家政要錄

冬青園主人

注意の價値

主人は新聞の探訪者の如く歩行する間にも目に觸るゝものは何くれとなく注意して視るの癖あるが或日の事なりき萬世橋邊を散歩せしに彼是同年輩と覺ぼしき風態賤からぬ三人

の少女學校の歸るさと見えて相伴ひて話しつゝ行けるニ逢へり。折しも向ふより一人の少女來りしかば間近くなるに隨ひ三人の話ハいつしか止みて眸ハ悉く一人の少女に集り頭上より下足まで眺むると見えしが行違ひ樣三人ハ齊しく顧みて件の少女の後姿を注視したり。女子の歩はたとへ遲きニもせよ相方より行違ふとなれバ其間ハ二三十秒ニ過ぎざるべし。然るニ恐るべし三少女の烱眼ハ一瞥の下ニ一少女の風態を細密ニ吟味したりと見へ、甲「何方の阿孃さんだか目元が涼しく口が約ッて生際が奇麗で憎氣のないとチ」乙「ア、いふ面長で豐下の顔にハ束髮のよくうつりまそとろして簪も天然の花簪で却て引立ちますチ」丙「それもそうですが第一着こなしのイヽと黒縮緬の羽織に紫の袴を着けた處ハ中々洋服よりハ上品ですチ」甲「だけれど妾達はア、いふ靴は好ませんヨ、跟が高くて指頭が尖りて成程恰好はイ、かも知らんがア、いふ靴を穿くと靴のやうな足が出來ますワそれより足のやうな靴を穿く方がイ、じやありませんか何にも支那の婦人を笑ひながら其眞似はしたくはありませんかオホ、、、、」

主人は此批評を竊聽して其眼光の鋭きには殆感じ入りたり。されども女子相評するの綿密なることは獨り此三少女に限らず女性一般の特性なり。主人は今此特性を解剖して綿密に評せんと欲するなり。すべて何事に限らず直接に己に利害を感ずることは最も注意を惹ものなり。女子の最も利害を感ずるものは其風態なるべし。己が風態は自ら見ること能はざるなり是に於て「人の態見て我態直せ」といふ格言にしたがひて人の態を見るときは斯くまで綿密に評することなるべし。批評も慣るゝにしたがひて其眼光自然に鋭くなり其眼前ニ來るものハ一瞥ニして評し盡さゝるなり。

風采を繕ふと女子ニ取りてハ大切なる務ニして其注意の行屆くことハ感ずるの外なきなり。然るニ風采を繕ふに費す注意の鋭きニ引きかへて他の大切なる場合ニ此注意力を應用することなく全く別人の如き看をなすハかへすがへすも惜むべきことなり。されども能力の足らざるものハ奈何ともすべからず女子ハ或點に於てハ注意力に富むことかくの如し主人ハ唯一方ニ偏せず一樣に大切なる事柄にハ一樣に注意あらんことを勸告するものなり。女子に取りて大切なる事柄とハ申す迄もなく家政を鹽梅することなり。家政を鹽梅するに付ての注意ハ風采を繕ふに要する注意よりも綿密ならざるべからず。此綿密なる注意ハ俄ニ得へきものニあらず必ず幼年の頃より練習するを要するものなり。是迄ハ此點を左まで大切とも考へざりしかバ等閑ニ付し去りしも深く咎むるニ足らず。既に其大切なることを知らバ專ら風采を繕ふニ費せし同じ注意を家政の上に及ぼすへきなり。今家政に付きて注意の大切なることを說かん。

何人と雖も若年の頃より万事と綿密に注意する習慣を得るにあらざれバ眞實に親切なる人とハなり得まじ。唯心バかりハ親切にもありつらん其結果にいたりてハ決して然らず。如何となれば親切とハ善くあれかしと願ふ心を指すにあらずして實際其心より生じたる出來榮をいふことなればなり。此に一人の女子あらん其人は常々心掛深くして交際の快樂家內の快樂の何たるを知るが故に瑣細なることにも注意して家內の快樂を與ふることに於て至らざる處なし。日光の望ましき場合ニ於

て日光を遮りて[illegible]さゝるとき煙草盆或は火鉢の火冷却し座蒲團或は椅子の位置よろしからざる時は此女子は烱眼之を見て不愉快と感ずる處も之を除き不順序なる處は之を正す、蓋し家内の萬事は配意するは女子の職分と思へはなり。茲にまた一人の女子あらん一向に此等の事に心をかけず下婢が朝餐の支度に後るゝ事あり、暗き冬の朝に雨戸を開けず日晡て後に窓の戸未だ閉ぢざるあり、椅子テーブルの背合に立あり、入れかたあしきにや火鉢の炭の燻るとあるも見向もやらず泰然として己の座に就くと常とせり。

かく兩女子の心掛を述べ來りてさて讀者に問もん今此兩女子の心掛こそ異れ其他の事に於ても兩人に少しも異るとなしとせバ孰れか交る人々に最多く愉快と感せしむべきか。其答は申迄もなく明なる事なり。されども此相違をなすものは一方に不足する處あるにあらず唯注意すると注意せざるとの差別あるが爲のみ。かく瑣末の事にもよく心を配り而も大事にもぬかりなきは世事に付きての智識と熟練より得らるへきのみ。注意の力は目前に來るものゝ大小によりて異るものにあらず瑣事に心を配るは注意力を磨くの好材料にして又大事にも直に應用し得るものなり。

實際己に接する人の人柄氣配と其身分を綿密に氣付くるにあらされば己れの好意を他人に通すると能はず又他人をして心服せしむるに足らず畢竟折角の親切も先方に通せずして已みなん。啻其心の通せざるのみか親切も其程を失へば先方の氣分を惡くするものにて先方が敏捷しき人か六ケ敷人ならば大に此方の仕打を批難するものなり。たとへば贈物をしく其當を得ざれば好意を博するとは扨置きかゝる不當のとをなすは畢竟吝嗇ならざるとを知らしむ底意あるが爲なり杯と痛くなき腹を探られ剰さへさげしまるゝ事あるものなり。之を要するに注意の風習を常に磨き置くにあらされバ眞實の親切を人に盡すと能はず且又若年の時この練習をなし置くにあらされバ肝腎必用のときにこの用をなさぬなり。

家政記者か常に説ける如く女子の大役も外交際を圓滑にし内家内を調和するに在りといふは如何にも六ケ敷やうなれども瑣事に注意するといふ祕訣を心得なバ心易き事なるのみ。社會に立てるも恰も舞臺に出てたるが如し千兩役者一人にても芝居も打てぬものにてそれ相應の敵役ありてこそ千兩役者も引立つ譯なりが故に男女調子を合しく社會の舞臺を立回るこそ交際の上手といふべけれ。

月報

○大日本婦人教育會　全會の趣旨組織等の事は既に前號に掲載せしが去月廿一日午後第二時より一ツ橋帝國大學講義室に於て其發會を催したり來會せし淑女紳士三百名餘に及び場所の廣大なるを以て名たる講義室も一の空しき椅子だに見出し得ぬ迄充ち滿ちて少しく後れて來りし者は已むなくて直立せし程の盛會なりき、最初本會が未だ婦人教育談話會たりし始めより盡力周旋一方ならざりし本會の幹事木村貞子先づ立ちて設立の趣旨規則等を演述し次に會員小鹿島筆子衣食住の事より徐々說き及ぼして婦人ハ二代目の人種を養成するの重任ある事を演說し次に師岡信子入會の主旨より女子の價値を高尚の域に進むるの方法等を說き次で水野粂子婦人の無識なるを慨歎して之れを匡正するには學藝を研究するの必要なるを

演說し、終りて色川國子、宇川盛三郎氏相次て女子教育に必要なる演說を爲し最後に加藤弘之氏男女相互の地位の變遷を演說して後辻新次氏本會々員一同に代りて本日來會を忝ふせし伏見宮御息所へ謝辭を述べ全く式を終りて四時半頃散會せり全日ハ森富子のバイオリン木村作子のチルガンにて鳥居忱氏の指揮に從ひ音樂學校生徒諸子の唱歌を演說の間に行ひたり、抑仝會ハ爾後每月第三土曜日に例會を開き本月の例會にハ杉亨二氏の女子教育に必要なる演說等もある由に聞けり。

○音樂會　去月廿九日木挽町の厚生館に於て海軍省御雇音樂教師エツケルト氏の催主にて行はれし音樂會は諸種の管絃樂の合奏、陸海軍樂隊の奏樂等もありて午後八時半より始め十一時に音樂全く終りを告げて後舞蹈もありていと盛んなりしと云ふ。

○青女會　仝會の發會を去月廿五日京橋開化亭にて催されたり、來會せし淑女八十餘名にて會長石川米子先づ本會設立の主旨を述べ、次て佐田九郎、鵜橋國太郎石川彝等諸氏の演說講義等もありて仝會每月第四水曜日に催さるゝ由にて次會よりハ引續き石川米子の家政學、鵜橋國太郎氏の教育學、石川某氏の經濟學、其他通俗平易に婦人に必要なる諸學藝の講義ある由。

○婦人唱歌會　仝會新設の事ハ前號に記載せしが愈本月中旬より九段坂中途の公園內統計協會に於て行はる由にて會員を甲乙二部に分ち初修の者たりとも丁寧懇切に教授せらるゝとの事にて練習の時間ハ一週に二回三時間にして會費ハ一ヶ月金五拾錢なりと云ふ世の唱歌に志有る婦人ハ入會して音樂の眞味を解得し給へかし。

○東京金闘會　仝第七回ハ本日午後より向島小梅村大谷木氏の別邸に於て開會せらるゝ由にて日本の箏、胡弓、三絃の合奏其他種々の遊戯餘興等も行ハるゝとの事なり詳細の景況ハ次號の誌上に掲載を可し。

○改良婦人大和服　京橋區弓町八番地池田康之輔氏ハ今度題號の如き婦人服を調製して汎く販賣をるよし、今其改良の趣意を聞くに近來西洋服大に婦人社會に行はれ貴婦人は常に高席に充つる有樣なるが幼年より衣服を着けて成人したる貴婦人の俄に襟頭を締め腹部を壓しおめに咽喉カタルを起し嘔吐を催し甚しきハ氣絕をる等の奇談は屢聞く處なり、且西洋人と袂を聯れて恥ぢざらんには莫大の費用を要し中人以下の辨し得る處にあらず、故に專ら衞生と經濟の點に注意し身体の機能を妨けざる樣又材料は悉く內國品を用ゐて調製し大和服と名けしよし、着用したる處にてハ其體洋服に讓らず片付仕舞ふにも簡便にして時間を要さゞれば貴婦人中にハ贊成の方も多く、已に或公會にも大和服を着用して出席されたる方もあり其他華族女學校、京都高等女學校、廣島高等女學校も已に贊成を表せられたる由なれば日ならず一般に流行をるに至るべし。

○京都婦人慈善會　一月十四日午後一時より京都倶樂部に於て例月會を開き音曲を催し二長、新青柳、東獅子、十段、をごもり、石橋等の曲もありて箏、八雲琴、胡弓を鼓したりと。

○京都私立女學校　上京區第三十組御幸町二條下ル京都私立女學校にてハ元醫學校在勤中出利胡氏、漢學者大亦俊氏、理學者清水某、畫工岸某等を聘し修身、歷史、家事、育兒の方法、寫生畫等を教授をるよし。

○婦人共勵會　一月廿八日下京第三尋常小學校內なる實錦舍に於て開會し米國人ケーンス女史ハ婦人家に在るの心得を演說し、雨森ひさ子之を譯演し、森田久万人氏ハ婦人の志氣を論ずといふ題にて演說し參會員二百四五十名ありし。

○堺女學校　大阪府堺區は兼て普通教育の盛なる土地なるが是迄尋常小學校附屬なりし三ヶ所の裁縫場を合併し完全なる女學校となさんとて昨年より車之町東二町に新築中なりし校舍は此程落成し一月廿八日開校式を擧行し大阪府知事の臨場もありて中々の盛會なりし由。

○丹波婦人矯風會　今度丹波船井郡に婦人矯風會を起し村內の婦女を集め家庭教育、家內衞生、家事經濟等の講談ありしと聞く。

通俗衛生學

醫學士　竹中成憲氏口述

健康は至極人間に大切な者にて快樂に暮にも利潤を得るにも皆健康が基です。家内に病人でもあればとても幸福に暮せません。一家を處理する主婦人方の御役目ですから如何したらば一家の健康が保てるかと云ふとは御存知あまて然るべきとでしやう。さて健康を保つ方法を説く者を衛生學と申します。衛生學は病氣にならぬ心掛を説くものにして決して病氣を治す爲めの者ではありません。尤も極こみ入たむつかしき者ですから今日から御談申すところは理解り易くもあまり普通な人の心得てゐるべきとだけ申ます。

まづ人間に一番大切な空氣から申上ましよう。空氣は何處にもあり錢なしでいくらでも入用なだけ得らるゝ者ですが人間には至極大事でこれがなければは直に死ます。人間か死ぬばかりでなく草木鳥獸蟲魚皆な生活てるとは出來ません。何故さう大切かと云ふと空氣には酸素があるからで人の呼吸するのは酸素を得るためです。食事は一日に三度すればひもじくはないが空氣はなか〳〵そんなとではなく一分間に十六度吸込ます。けれども身体にくるひのある時は二十五六度もやります。ですから飲食物は湯水から食物まで總てゞ一日の入用は僅か一升六合ほどですが、空氣を吸込むとは大層にて二十四時間内にザット五十石にて丁度飲食物の三千倍だけ入用なのです。何故そんなに入用だらうと疑ふ人もありましやうが空氣のない所に行て初めてなるほどゝ合點がまゐります。口と鼻とを押へて御覽なさい空氣の効能を試すには最も手輕な試驗です。

この大切な空氣は種々の者が混りて出來たものにて、其中主な者は酸素と窒素との二です。まづ此外に炭酸と水と塵とが是非あります。さて是等の者はあれも十これも十と平等に混てゐる者ではありません。空氣百分中窒素が七十八、酸素が二十一にて殘る百分の一は水と炭酸と塵とです。窒素はかやうに一番澤山ありても人間に直接の効能はありません、けれども前申た人間に大切な酸素を薄める効があるのです。いかに良藥なればとて水もなにも割らずに多量に用ゐれば必大害があると同じく酸素も人間に至極大切な者なれど酸素ばかり吸込めばつよすぎますから血の循環がはげしくなりすぎて反て死ます。これを窒素が丁度よく薄めるのです。

さてこれから酸素の御話ですが今紙なり木なりに火を點けると燃る物がある間はいつまでも燃てゐます。なぜ燃るかと

云ふに酸素があるからで草や木が自然に朽るのも動物の死躰の腐るのも皆酸素の作用にて、燃るのと異なるはたゞ劇しくないだけです。人の身躰の温いのも酸素があるからで、炭が酸素と化合して熱がでると同じことにて、毎日食べる食物が血の中にて酸素と化合して熱が起るのです。口と鼻とを塞いで酸素のはいる道をなくすれば人は死んで冷くなるは、ヒチリンの口を塞ぐと火は眞黒になりて熱が無なると同じです。

これは酸素が全くなくなりたる場合の御話ですがなくならずとも通常の分量より減ても死ます。今すこしも空氣の出這せぬ室に人を入れて置けば、前申した通一分間に十六度呼吸して酸素を減しますから室内の空氣は段々酸素が少なくなり、随て内に居る人は呼吸が苦しくなり、身躰は段々冷くなり、遂には悶え苦しんで死ます。 この空氣を試驗して見ると酸素は十四以下迄減て居ます。「空氣百分中酸素が十四以下にあれば人は生きてをられぬと云ふことがこれでわかります、けれども百分中十四酸素があればこれでよいと云ふのではありません、たゞいきてゐられると云ふだけにて勿論毒です。こんな空氣を長く吸へば遠からず死にます。酸素が二十一、窒素が七十八の空氣を吸ふがよろしい。酸素の足らぬ空氣は毒です。

だから寄席や芝居のやうな人の澤山集る所は毒です。御宅な御いでの時も折々空氣をいれかへるがよろしいです。

家外では人が千人万人居ても酸素は減りません家外では何處でも同じです。ですから家外へ出るのは藥です。醫者によると山は木が澤山あるから酸素が多い空氣が清潔だと云ひますが是は虚誕です市でも山でも海濱でも同じことであります。

素酸ではありませんがすこしく變りたる「オゾーン」と云ふ者があります、ですから序でに一寸申述べます「オゾーン」は酸素より勢が強くどんな金屬でも食ます、鐵などは見る間に赤くなります、たゞ「オゾーン」に食ぬ者は金と白金です。「オゾーン」は雷のなるとき出來る者にて、ごろ〳〵樣の鳴りたる後はせい〳〵すると云ふはこれが出來るからです。けれどもこれは家の内には決してありません、家の内にはいると直ぐ酸素と生れ替ります。「オゾーン」はつよい酸素です。

さてこれから炭酸のお話を致ます。炭酸は人間には毒な者ですが、然し人間が斷えず作る者にて息を出すとき毎に口から外に出るものです。家の内は多く外は少きものです。外では通常空氣一万分中多くて四です。東京位の町でも大概三位のものですから東京でも外の空氣は決して惡くはありま

せん。炭酸は人には毒な者にて澤山あると死にますが一万分中三や四では平氣にて人が死ぬのは百分中に三か四あるときです。なにしろ死なずとも澤山あれば毒ですから悪き空氣は呼吸せぬが一番です。炭酸は深い井戸や空氣の通の悪い穴倉には多い者でよく人の死ぬことがあります。然し幸なことには人の死ぬ位な時は火が消えますから穴倉などにはいるときは蠟燭を持ていけば安全で火の消えかゝりたらば早速でゝ來るのです。

空氣中の炭酸は人の呼吸や腐敗物や庭園の草木よりも生ずる物ですから其近處の空氣は段々に悪るくある道理です。併し妙な事には草木は夜間炭酸を吐き出し、晝間之れを吸ひ込みます。だから植木鉢を夜間室内に置くのは悪るう厶います。又炭酸は地上よりも出てくる物で、古昔から我國杯でも悪氣が地上から騰つと云ひ傳へたは尤もの事です。かく種々の原因から炭酸が空氣中に混和したならば仕舞には世界がみんな炭酸ばかりで取圍まれねばなりませんが、造物主の仕掛は巧なもので草木は晝間酸素を吐き出し、夜間酸素を吐き、動物は植物の吐き出す酸素を吸ひ取て炭酸を吐き出し、其炭酸から植物は炭素を吸ひ込み、互に新陳交代して別段空氣が炭酸ばかりになる患もありません。炭酸の外空氣中には多量の水分があつて空氣の量の百分の一は水です。併し此水分は蒸氣の形で存在して居ますから肉眼では見えません。又空氣が温暖なる時は多分の水を含み寒冷なる時は少分の水を含みます。此水は空氣が急に冷えて參る時は雨、雪、霰杯となりて降つて來ます。空氣中に含む水分の多寡を計るに毛髮を用ゐる事があります。毛髮は濕れば延びますし、乾けば縮みますから寒暖計の樣な装置で玻璃の筒に毛髮を入れて其延縮にて空氣中に含む水分の多寡を知る器械があります。之を毛髮驗濕器と申します。段々に世の中が開けて參りましたら此驗濕器を銘々家に備へる樣になるでしやう。

海の遠近に從つて空氣の乾濕の差異があります。日本の樣に四面皆海に取圍まれたる處の空氣はどうしても濕り勝ちです。だから空氣の濕から起る脚病リヨウマチ杯云ふ病が多う厶ります。又森林の多い處も濕り勝ちです。此濕氣を防ぎますには柳の木を植附けるのが宜しう厶います。柳の木は多分に水分を吸取る物ですから土地の濕氣を防ぎます。東京にても脚病杯の多い場所は下町の樣な低い所ですから斯樣な場所には澤山柳の木を植附けたら宜ろしう厶いませう。

動物ハ酸素と吸取り、植物ハ動物の吐き出した炭素を吸取り互よ助け合つて參る事ハ前よも申述べた通りでそが、空氣中に含む百分の二十一の酸素が二十よ減りますにハ全地球の空氣の量が多うムいますから數千年掛るそうでムいます。

さて此から如何して人間が炭酸と作り出そうを少々お話し申しましやう。皆樣もご存知の通り鳥類でも魚類でも皆空氣を呼吸しあければなりません、魚類ハ水中ふ含む空氣を呼吸しますか、又ハ水面よ浮び出てパクパクと空氣を呼吸する魚類もムります。偖かくの如く吸取ッた空氣ハ先ヅ始め口うふ咽喉を通ッて肺臟に入り其後幾何ともあく細うに分れて極々細小き管に入りまそ。此等の管ハ其先に薄き皮の袋が附いて居ます。此袋ハ惡るき血則ち汚れた血で圍まれて居ります。此の惡るい血ハ今此袋の中に入りました新鮮い空氣中より酸素を薄い袋の皮を通して吸ひ取ッて惡るい血の中にある炭素を又袋の皮を通して空氣に與へます。斯樣ふして袋の周圍にある惡るき青血ハ皆眞赤あ善き血と變ります。又吸込ミましゝ空氣ハ多量の炭酸と含んで吐き出します。又吸込ミました空氣ハ

酸素……………二一、

炭酸……………〇、〇四

の割合でそが吐き出す時の空氣ハ

酸素……………一六、

炭酸……………四、

の割合に爲りまして炭酸ハ殆 吸ひ込んだ時の百倍も殖ゑて參りますゝだうら一度口より吐き出した空氣を再び吸込むのハ大層健康上に害がありまそ。

前に述べた種々の混合物の外ふ空氣ハ多量の塵埃を含んで居まそ。其塵埃の空氣中に存在するのに二の形があります。則ち瓦斯の形と固形の形との二種です。此中瓦斯の形にて存在する空氣中の塵埃とハ千住の如き火葬場の烟筒とう、諸製造所の烟筒とう、其他家々の竈の烟出しうらも出て參ります。英國の樣な製造の盛んあ國でハ市中が黒烟で一杯ふ爲ッて居ります。又支那朝鮮の如き樣あ國でハ大小便と路上よ垂れ流しますうら實ふ汚れたる瓦斯が空氣中へ混りまそのハ大しゝものです。或る人が英國でハ黒い風が吹き、支那朝鮮でハ 黃い風が吹くと惡口と言ひましたのも 尤 の事であります。

さて只今迄空氣中よ混りて居るゴミの中にハ目に見えぬ瓦斯体即火中より出る炭酸と形ありて目よ見ゆる微塵あどがある

廣告

春の屋主人、二葉亭大人合著

(新編)浮雲

第二篇　定價金五拾錢

浮雲の一篇一たび出て従来の浮世小説顔色なしと迄に江湖の諸君子の喝采を得たる其浮雲の二篇にハ二葉亭大人が又一層の腕を振ひ新奇の工風と凝されたるに春の屋主人も力と併せ錦上に花を添られたれば面白さたぐひなし此篇に於てハ微妙の人情益々神に入り主公の性情ハ云ふも更なり他の人物の性質の如きも恰も紙上に活動せんとす其文章の如きハ依然俗文体を用ひられされ共第一篇に立優りて婉曲にして且優美なり其脚色の如きハお樂の爲に畧して云ハず請ふ一本を求て小説の眞味を味ひ賜へ

江口高達譯述

結婚の枝折（一名配偶の擇び）

全壹册　定價金卅五錢

此書ハ青年男女各々迷ふ所ありて後来を慮らず婚合するが爲に悪結果を招き或ハ終生の不幸を受る者尠からざるを憂ひ専ら醒悟せしめんが爲にヒルドレッスの原書を江口先生が譯述せられたるものなり蓋し婚姻ハ人倫の大禮にして小にしてハ一身の禍福之に因りて定り大にしてハ一家一國の隆替亦是に淵源するものなり夫れ輕婚濫離の弊邦家を毒したるもの古来其例に乏しからず人の最も恐れ愼むべき重要の事たり今や米國その弊習最も熾んなるものあるが如く實に離婚の紛擾法廷を煩ハさゞるの日々に千を以て數ふるに至ると云ふ是を以て大に識者の耳目を動かし其論ずる所日として之れが源因と矯正の法とに非ざるハなし翻て我日本の現状を察するにその流弊の源因する所素より大に彼れと其趣を異にすれども輕婚濫離の弊風又その配偶を誤り生涯不幸に沈淪する者甚だ多し此書尤も我が青年男女及その父母たる者の害毒に沿らんことを恐れその方針を示すや頗る深切なりと云ふべし亦譯述文の如きも力めて平易通俗の語を用ひいかなる婦女子と雖も讀み易く解し易からしめたれば江湖の看官一讀して此言の誣ざるを知り給へ

末松謙澄、二宮熊二郎合譯

谷間の姫百合

第壹編　定價金五拾錢

此書ハ前年英國の小説新誌に掲載して非常の好評を得歐米の諸國にて頻に翻刻出板したる人情小説の譯述にして一の貴公子が一賤女に愛着して他郷に飄泊する所より話を起し世態人情の委曲を極め詞華文彩の能事を盡し人をして一讀卷を措く能はざらしむ而して其本旨の歸着ハ交際の禮法を明にし婚姻の愼重すべきを示すにあり譯文ハ巧に日用普通の言語を用ひ大人君子も之を讀みて樂み幼童婦女も之を聞て喜ぶ實に譯述文ありて以来の珍書なり

山崎忠興譯

(貴女紳士)交際の栞（一名西洋遊戯の鑑）

全一册

今や洋風の交際日を追ふて盛に行はれ身中人以上に在るの士君子ハ往々夜會舞踏の筵に臨まざるを得ざるの塲合少からず然るに此交際の法ハ未だ本邦に新なるを以て時好を追ふの士君子ハ勿論舊套を守るの人と雖も之を知ざれバ大に恥を取ること尠しとせず本書は男女公會に於て坐作進退の注意より紳士貴女互に相對するの心得等に至り又舞踏の種類方法數種を擧げ丁寧詳細に書き述べたるものにして加ふるに傍訓をも附したれバ婦女子と雖も一讀忽ち交際の新法に通じ舞踏の諸法を諳するを得實に當世必讀と謂ふべし請ふ江湖の紳士貴女諸君續々愛購を賜はんことを

東京本町三丁目
金港堂　原亮三郎本店

大坂北久寶寺町
金港堂　原亮三郎支店

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

遞信省認可

理學士賀古益美編纂

平算教科書 上卷

定價金七拾五錢
郵稅貳拾錢
下卷近刻

目錄 整數、數ノ性質、分數、小數、諸等

從來の算術書は理論を後にし徒に難問を排列し機械的に解算するを主とそ故に時に問題に附そるに術曰云々を以てし如此せば即ち答を得ると記し何故に術に從へば答を得るやの道理を說かず然るに所謂難問と云ふものも高等數學に在てハ容易なるものなり初學者にして徒に之が爲に時日を費すハ愚の至りと云ふべし森文部大臣の演說にも難問と以て學生を困しめ以て數學を教授そるとあるその非を論じられたり西洋諸州に於ても近代數學教授法ハ大に面目を改めたるなり獨り我國古風の書を用ゐ古風の教授法を墨守し以て滿足すべけんや是此書の出版ある所以なり

東京々橋區宗十郎町拾壹番地

吉岡商店

醫學士竹中成憲著

改訂增補 **肺病養生法**

定價金四錢郵稅共金六錢一錢切手代用不苦施本等ノ爲十册以上御購求ナレハ特別ノ御相談可申府下ハ各雜誌屋繪草紙屋ニ就テ御購求被下度シ

此書ハ恐るへき肺病を未然に防くとを親切に說きたるものにて之を衣服、呼吸器、入湯、飲物、食物、煙草、運動、寢床、談話、勉強、職業、藥、溫泉の十三門に分ち極めて平易に極めて親切に說きたれハ一本を携へなバ益すると尠からざるべし殊に廉價なれは慈善家にハ施本として頒つに最も便なり

本郷湯島天神町一丁目五十九番地

取次所 **成美社**

社告

○いらつめ代價 一册金八錢 六册(半年分)金四十五錢 十二册(壹ヶ年分)金八十錢 府外每號郵稅一錢宛申受○每月第二土曜日發兌

雜誌代ハ前金ニ付御注文ヲ受クルモ金子到着セサレハ配達セズ金子盡クレハ配達ヲ止ム依テ金子ノ切レサル樣前以テ御差出ヲ乞フ金子御差送ノ手續ハ郵便小爲替ナラハ拂渡郵便局トアル所ニ本郷郵便局ト御記入ノ事幷ニ受取人氏名トアル所ニ本郷湯島天神町壹丁目五十九番地成美社ト御記入ノ事○郵便切手ニテ御差送リナラハ一錢切手一割增ニテ御差送リノ事二錢以上ノ切手ハ御斷

○廣告料一行(五號文字二十七字詰)金五錢○十一行以上金四錢五厘○二十一行以上金四錢

但前金ニアラサレハ載セズ

いらつめ賣捌所

東京神田區佐柄木町	東海堂
同 同 雉子町	國々社支店
同 同 淡路町壹丁目	巖々堂
同 日本橋區蠣殼町壹丁目	信文堂
同 同 新葭町	長明堂
同 本郷區元富士町	盛春堂
同 同 春木町貳丁目	解明堂
大坂心齋橋備後町	岡島支店
堺熊野町	高山慶雲堂
名古屋本町貳丁目	石版舍
信州長野大門町	會眞社
陸中岩手肴町	華文舍

發行人兼印刷人 武田安之助

編輯人 正木政吉

主幹 新保磐次

發行所 成美社 東京本郷區湯島天神町壹丁目五拾九番地

第八號

(築地活版製造所印刷部刷行)